

谷崎潤一郎とロシア

柿沼伸明

1. 序論

谷崎潤一郎とロシアの関連などと言うと一見、奇警に響くことかもしれない。『春琴抄』や『細雪』や『少将^{しげもと}滋幹の母』等で端正な日本の古典美を浮き彫りにし、晩年まで『源氏物語』の現代語訳に彫心鏤骨したこの純然たる国文作家とロシアとは縁もゆかりも無いと思われるのが大方の向きであろう。実際、国文学研究者の手になる谷崎潤一郎の研究著書・論文のリストを覗いてみても、このような問題関心から作家を論じたものは皆無に等しい。しかしながら、谷崎の作品を丹念に読み進めていくと、意外にも多くのロシア人が登場することに気づかされる。時代順に並べただけで、『独探』(大正4年)、『小僧の夢』(大正6年)、戯曲『本牧夜話』(大正11年)、『アエ・マリア』(大正12年)、『痴人の愛』(大正13-14年)、『一と房の髪』(大正15年)、『蓼喰ふ虫』(昭和3-4年)、『細雪』(昭和18年-23年)と計八篇にも上る。このことからだけでも谷崎とロシアとの因縁の浅からぬ事情が窺えるであろう。

上に列記した作品のうち『本牧夜話』から『一と房の髪』までは作者の横浜居住時代(大正10-12年)と深く関わる作品であり、舞台の一部もしくは全体が横浜に設定してある。この期間は谷崎の西洋心酔の時期と重なる。一般に『^{まんじ}世』と『蓼喰ふ虫』の連載が開始される昭和3年を境に作家の伝統回帰・古典回帰という現象が生じたと見なされているが、戦中から戦後にかけて間断なく書き継がれた『細雪』はそれ以降に属する。谷崎が多くのロシア人を自らの作物に採り入れた事実は彼の西洋観と表裏一体をなしている。その点、作家内部の西洋観の変遷とともにロシア人の描写も微妙に変化していく。筆者の興味は、第一に、谷崎がロシアに関心を寄せるようになった契機、第二に、ロシア人の描写を通してこれら作品に表われた彼の西洋観の変遷、第三に、著作の背景に濃厚に投影されている明治から昭和初期にかけての日露接触の状況(主として谷崎のような洋行経験のない日本人が当時、どのようにロシア人を眺めたかという時代風俗史的な観点からの)に存する。なお、本論文における谷崎の原著からの引用は愛読愛蔵版全集(昭和56-58年、中央公論社)に拠り、巻数と頁数を示

す（ただし、原則的に同一作品からの引用は二回目以降、巻数名を省略することとする）。また、読みやすさを考慮して旧仮名の表記は引用部において現代仮名づかいに改めた。

2. 谷崎のロシアへの関心の背景

谷崎がロシアに関心を抱くに至った遠因はその生い立ちと交友関係に負うところが多いと思われる。まず、谷崎が呱呱の声を上げた日本橋蠣殻町^{かきがら}の生家というものがロシア的雰囲気^{まなざし}に彩られていた。潤一郎の祖父谷崎久右衛門^{きゅうえもん}は、宣教師ニコライの創立した日本ハリストス正教会（ロシア正教会）の信者であった。ただ久右衛門は明治 21 年 6 月に五十八歳で逝去し、数えて三歳であった潤一郎は直接、祖父の^{おもかげ}「倂」を記憶しているわけではない。潤一郎は子供時代にしばしば人気のない奥の離れ座敷に通い、そこに安置されている祖父のあがめた「マリア像」の前に佇んだ。「生れた家」という随筆にはその時の感慨が次のように記されている。

祖父は晩年に耶蘇を信じたとか云う話で、写真の側には大きな額縁の中に、マリヤの像が入れてあった。それは立派な油絵のように覚えているが、恐らく西洋の名画の複製だったに違いない。兎にも角にも、天を仰いで合掌して居る神々しい聖女の^{まなざし}「眸」は、頑是ない当時の私にも不思議な威厳と畏れを感じさせた。私はその像を見に行くのが好きでもあり気味悪くもあった。今考えてみると、マリヤの像は二つあって、一つは子供のイエスを抱えていたように思う。私にはその子供の絵のある方の絵が一層不思議で、抱いている聖女の、碧い眼をぞっと視ていると、次第に云い知れぬ怯えを感じて、こそこそと座敷を出てしまうのが常であった。（7 巻、515-516 頁）

似たような記述は回想記『幼少時代』にも見出されるが、この「マリア像」はイコンと考えると差し支えないであろう。聖母のイコンを眼にしたときの畏怖と敬虔の感情が、谷崎生涯の文学的テーマとなる女性崇拜の原型的体験をなしたと述べてもあながち過言ではなかろう。作家の内部に元来、生得的に具わっていた女性崇拜という気質がイコンに触れることによって初めて自覚されたという点で、このイコン体験はいわば「性の目覚め」に似たものだったといえる。「西洋の男子はしばしば自分の恋人に聖母マリアの姿を夢み、『永遠女性』の倂を思い起すと云う」（20 巻、250 頁）と「恋愛及び色情」に書かれているが、聖母像に現前する「永遠女性」というアイデアに対し

て仰慕、尊崇の念を捧げるという事象をいかに日本の文化的伝統の枠内で確立したらよいかということに後期の谷崎は心を砕いた。いずれも身分下の男がさるやんごとなき上臍じょうろうに想いこがれるという構図に則った『盲目物語』・『武州公秘話』・『聞書抄』・『三人法師』のような歴史物は、かつてアイコンを目前にしたとき覚えた心の戦慄を日本的土壌に再現させようとした試みのように筆者には思えてならない。そして、「恋愛及び色情」で吐露されているように、そのような女性崇拜を情弱として擯斥ひんせきする鎌倉時代よりの武家の気風以前にあったみやびな平安期王朝文化（特に『源氏物語』）を作家が愛惜するのも、これが西洋の聖母崇拜に近いと感じられるためである。また、谷崎文学の主題の一角を占める「母恋い物」（『母を恋うる記』・『吉野葛』・『少将滋幹の母』・『夢の浮橋』）における神聖不可侵な母の像も、若かりし日には錦絵に描かれたほどの美人であったという実母せき関とこの聖母マリアのイメージとが二重写しになっているのではないだろうか。

潤一郎の祖父の正教会入信に関連して述べると、久右衛門が受洗した正確な年というものはこれまでに分かっていない。永栄啓伸氏は評伝の中で「祖父の死がちょうどその（＝ニコライ堂の）建設半ばの明治二十一年であったことを思えば、布教が盛んに行われていた頃に入信したのだろうか」¹と推測している。ニコライが遺した日記には「今日まで毎週月曜日と木曜日には蠣殻町で説教をした」（新暦 1886 [明治 19] 年 3 月 15 日）と綴られているので、明治 19 年頃にニコライ自身が定期的に日本橋蠣殻町へ説教しに出かけていた様子だ。あるいは久右衛門の入信もニコライの積極的な宣教活動の賜物たまものであったかもしれない。また、久右衛門が胃癌のため病床に臥すようになると、「ベルツ博士が此の家へ診察に来た」（17 巻，64 頁）と『幼少時代』に書かれている。しかし、ベルツといえは当時の日本医学界の最高権威、皇族家の侍医も勤めていたほどの人物であり、そう簡単に普通の日本人を往診してくれるものではない。ニコライとベルツは相識の関係にあったようなので²、ベルツはニコライの懇請を容れて久右衛門のもとを訪れたのではないだろうか？ もしそうであるなら、久右衛門はかなりニコライに近い信徒であったと想像される。

次に、青年期の潤一郎を取り巻く人々にロシア文学愛好者が多かったのも彼をロシ

¹ 永栄啓伸『評伝 谷崎潤一郎』（平 9・7，和泉書院），12 頁。

² 中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』（平 8・8，岩波新書，岩波書店），210 頁参照。中村先生の記述によると、ニコライはロシア領事館駐日公使ローゼンを介してベルツと関係をもっていた模様である。なお、明治 19-21 年のベルツの日記はごく些少であり、谷崎家往診については触れられていなかった。

アに親炙させるきっかけとなったと思われる。府立一中、一高、帝大を通しての潤一郎の親友に小説家・歌人の大貫晶川^{しょうせん}（岡本かの子の実兄）がいる。二人は府立一中への同期入学だが、二年生のときに谷崎が飛び級をしているので、以降、学年としては大貫が一年後輩となる。大貫は性欲と倫理の背馳に悩む当時の典型的な文学青年であり、文芸部委員を伴にした関係などから夙に谷崎と気脈を通じさせた。一高の寮生活を活写した『^{あつもの}羹』の佐々木卯之助、精神的規範を芸術に求めるか宗教に仰ぐかで揺れる明治末期の青年を題材とした『亡友』の主人公大隅君のモデルはいずれも大貫晶川である。『亡友』の大隅君は一人の作家に凝り出すとそれをとことんまで極めないと気が済まない性質で、最初、近松の浄瑠璃や三馬に熱中し、語学力の上昇につれて英訳のツルゲーネフを崇拜するようになる。一高時代の谷崎が大貫との熱い文学的交流を通してロシア文学に親しんでいった様子は次のような叙述からも窺える。「当時、実家が貧しいために、余計な洋書を^{あがな}購う程の小遣銭を持たなかった私は、いつも彼（＝大隅君）から効能書きを聴かされて書籍を借り受ける事になって居た。たしかツルゲーネフでは、Sportsman's Sketches を一番先に手に入れて、彼が恐ろしく昂奮して、北寮八番の私の部屋へやって来たことを覚えて居る。その次に貸してくれたのは『ルディン』と『スモオク』とであったろう。『スモオク』を読んだ時は、私もひどく感動して、創作熱がむらむらと燃え上るのを覚えた」（4巻、110頁）。この描写からも分かるように、谷崎はロシア文学の作品を主に英訳を通して読破した。大貫は谷崎と一緒に明治43年の第二次「新思潮」の創刊にも参加したが、結婚や家業の破産などもあって次第に文学から離れ、大正元年に二十五歳の若さで夭折する。死後の大正2年に彼の訳書であるツルゲーネフの『^{スモオク}煙』が新潮社近代名著文庫から刊行された。ちなみに、谷崎はロシア文学のなかではトルストイの『アンナ・カレーニナ』が好きだと告白している¹。

大学に入学した頃の谷崎は何としてでも文壇に出たいという宿願を胸に秘めていた。国文科を選択した理由も、「いよいよ作家になろうと云う悲壮な覚悟をきめたので、国文科だったら、学校の方を怠けるのに一番都合がいいと考えたから」（『青春物語』、13巻、359頁）である。明治末期の当時としては現在の文学賞のような無名作家が一躍、文壇におどり出るための登竜門的な場は無きに等しかったので、誰か有力な人物

¹『座談会 谷崎文学の真髓』（『文芸臨時増刊 谷崎潤一郎読本』所収、昭和31・3）において武田泰淳からドストエフスキイについての関心を問われた谷崎は、「トルストイのほうが、ぼくはズッと好きですよ。（…）一番好きなのは『アンナ・カレーニナ』でした」（56頁）と答えている。

の手蔓に頼むほかなかった。そこで谷崎が眼をつけたのが、帝大文科の先輩で第二次「新思潮」旗揚げ時には既に市川左団次と自由劇場を創始していた小山内薫と、「自分の芸術上の血族の一人」と認めた新帰朝者の永井荷風であった。『青春物語』においてもこの頃の事情を素直に打ち明けている。「何と云っても最初に私が門を叩いたのは小山内薫氏であり、私を文壇注目の的にして下さったのは永井荷風氏であった。もし小山内氏を担がなければ、『新思潮』と云うものがあんなに早く認められなかっただろうし、又荷風氏の推挙がなければ、私が一人前の作家になる時期は尚もう少し後れたであろう」(383頁)。第二次の同人は第一次「新思潮」の創始者である小山内薫を引き込むことで、いわば看板を譲ってもらったことになる。よく知られているように、小山内はモクワ芸術座のスタニスラフスキ演劇理論の唱導者であり、ロシア演劇には造詣が深く¹、自由劇場においてチェーホフの『犬』、ゴーリキイの『どん底』(『夜の宿』と改題)、アンドレーエフ『星の世界へ』と矢継ぎ早にロシアの戯曲を舞台にかけていった。「新思潮」第一号に処女作の戯曲『誕生』を上梓した谷崎は当然、演劇にも興味を持っていただろうし、自由劇場にも足繁く通ったに違いない(彼が舞台稽古を見にきていた荷風に『刺青』が載った号を手渡したのも劇場の食堂においてであった)。「新思潮」第五号には明治43年上演の『どん底』の劇評が掲載されており、そこで谷崎は「殆ど此れと云う筋もなく、出て来る役者がバラバラに勝手なことをしたり、喋ったりして居る芝居——あの位大胆な、あの位新しい舞台面を、旧套に泥んだ日本人の眼にひろげて、驚かしてくれたのが先づ何よりも嬉しい」(『夜の宿』と『夢介と僧と』と)、22巻、2頁)と小山内の新劇運動に喝采を送っている。

この他、あまり人口に膾炙していないことと思うが、潤一郎の実弟谷崎精二(小説家・英文学者・早大文学部教授)は大正年間にガルシンの『赤い花』(大正2年、海外文芸社)とメレシコフスキイの『キリストと反キリスト』の第二部『復活せる神々』——『先駆者』と改題(大正5年、早稲田大学出版部)——を直接、ロシア語原語か

¹ 小山内薫は『新思潮』誌上でもチェーホフの長編『決断』の翻訳を掲載している。自由劇場で上演されたゴーリキイの『夜の宿』はドイツ語テキストからの翻訳で、その下訳をしたのは当時、『新思潮』同人の和辻哲郎であったという(諏訪春雄・菅井幸雄編『講座日本の演劇5 近代の演劇1』、平9・2、勉誠社、136頁参照)。ただし、スタニスラフスキイからの影響は、大正元年から2年までの外遊時にモスクワ芸術座の公演を観劇してから以後のことであり、大正13年開場の築地小劇場時代から顕著になる。築地小劇場では、ゴゴリ『検察官』やチェーホフ『桜の園』・『三人姉妹』・『伯父ワーニャ』等のロシア戯曲が小山内の監督で舞台化されたが、彼はスタニスラフスキイに直接、手紙で問いただすなどしてモスクワ芸術座の演出に忠実であるように心がけた。後年、小山内はロシア革命十周年記念祭に招かれモスクワで講演を行っている。

ら翻訳している。精二には他に『ポオ小説全集』の訳業がある。エドガー・アラン・ポーには潤一郎も多大な関心を寄せており、江戸川乱歩が絶賛した『途上』のようなポー風の探偵小説を書き、『白昼鬼語』では『黄金虫』に出てくる暗号解読の方法をそのまま使用している。ただし、潤一郎と精二とは格別、芸術上の意見を闘わずというような間柄ではなかったらしい。「谷崎家の親戚の一員として極めて常識的な事柄を語り合う外には、(…)兄弟なるが故に相近づくと言ふ機会はない」「(性質の違った兄と弟」, 23 巻, 51 頁) と潤一郎が記していることからそれは窺える¹。それでも弟がロシア文学の作品を訳していることぐらいは知っていたらうし、ひょっとするとその訳書に眼を通したかもしれない。精二がどのようなきっかけでロシア語を学習するようになったのか定かでないが、或いは祖父が正教会の信徒であったことなども影響しているのではないだろうか？ 大貫, 小山内, 精二といった潤一郎を圍繞する人物の足跡をたどってみると、明治末期から大正にかけての日本における教養主義の風潮のなかでのロシア文学受容史が知れて面白い。

大正 9 年に映画制作会社「大正活映」に顧問として招聘された潤一郎は、以来、横浜元町にあった撮影所に頻繁に通うようになる。この関係から大正 10 年に小田原から横浜本牧へ居を移す。本牧の家が台風で倒壊すると、山の手に移住し、大正 12 年の関東大震災の時まで横浜で生活した(震災時は箱根から小涌谷へバスで向かう途中

¹ 谷崎兄弟の気質の懸隔については、精二の側からも表明されている——「如何なる前世の因縁でか、私と潤一郎氏とは骨肉の兄弟として生れ合い、『四つ違いの兄さんと云うて暮して居る中に』お互の気持は漸々懸け離れてしまった。現在に於て二人は其の人生観も宇宙観も、従って又個々の事象に対して抱く思想感情も著しく相違して居る。潤一郎氏はより多くマテリアリスチック、私はより多くスピリチュアリスチックである」(谷崎精二「谷崎潤一郎論」、『日本文学研究資料叢書 谷崎潤一郎』所収, 昭 47・12, 有精堂出版, 210 頁)。このような二人の性格の違いはロシア文学の捉え方にも表れている。潤一郎がトルストイやツルゲーネフ等の純粹芸術面に惹かれたのに対し、精二は主にロシア文学の思想的側面に強い関心を覚えたようだ。それは、「ロシアのインテリゲンチヤはいつも民衆の幸福という事を彼等の理想として第一にかざしていると云われるのに、日本のインテリゲンチヤは文学的サークルを離れ、全体として見ても甚だ民衆の幸福に対して冷淡である」(谷崎精二「文学の一方向」、『谷崎精二選集』全一卷所収, 昭 35・12, 校倉書房, 607 頁) という発言からも窺える。家業安泰の時代に乳母日傘の幼年期を送れ大学までの学資を親戚から供出してもらえた(府立一中と一高時代に住み込みの家庭教師を行ったが、小間使いへの恋文事件で放逐される)潤一郎と異なり、一家の零落後、苦学力行して(七年間の発電所夜勤をしながらの学業継続で一時は自殺も考えた、と選集後記に述べられている)博士の学位まで取得した精二が文学の社会的責任という見地からロシア文学を理解したのはむしろ当然であったらう。

だった)。当時、「本牧といえば、まず誰しもチャブ屋を思い出すように、外国人の出没する地区として知られていた」¹というから、谷崎は意識的に西洋風の町本牧に住まいを定めたのだろう。震災後、横浜での暮らしを振り返った「港の人々」という随筆によると、前の借家人はロシア人で、隣には日本人の愛人を囲ったボリース君という銀行勤めのロシア人が住んでおり、谷崎の家族は彼女と懇意になるに従ってよくボリース君について噂し合ったという。家の近くには「キヨ・ハウス」という海外にも聞こえたチャブ屋もあった。また、横浜時代に谷崎は夫人同伴でワシーレイ・クルツピンというロシア人の所へダンスを稽古しに通った。山の手に移ってからも、家の東隣にはイーラという可愛い娘のいるロシア人の家族が住んでいた。このように横浜での生活期間中、日常的にロシア人と交際する機会が多かった。『アエ・マリア』を読むと分かるが、当時、横浜に居留していたロシア人は1917（大正6）年に発生したロシア革命のために故国を脱出してきた人達で、爪に火を燈すような生活を送っていた。彼らは主としてロシア極東部の都市ウラヂオストクから航路で日本に至ったものと思われる（ウラヂオストク―敦賀の経路が多い）²。震災前の横浜は日本における亡命ロシア人の中心地であった。

英語圏における谷崎文学の紹介は太平洋戦争勃発のために遅れ、戦後、ハワード・ヒツベトやエドワード・サイデンスティッカー等のおかげでようやく陽の目をみることになる³。晩年の谷崎はこれら英米系日本文学研究者と積極的に交流し、ヒツベト、

¹ 野村尚吾『伝記 谷崎潤一郎』（昭47・5，六興出版），273頁。

² 大正期にはロシアと日本を結ぶ幾つかの航路が存在した。ウラヂオストク―敦賀間には大阪商船が週一回、ロシア義勇艦隊汽船が週二回の定期船を走らせており、前者には日本海諸港とウラヂオストクを繋ぐ月三回の航路もあった。その他、日本郵船は三週一回の神戸―ウラヂオストク間定期航路を保持していた（以上、杉山公子『ハル濱物語』，昭60・12，原書房，94頁参照）。ロシア本土から直接日本に至る道ばかりでなく、中国を通過して大連や上海から船で日本へ入国する方法も残されていた。

³ アンソニー・チェインバーズの谷崎研究書中の文献目録（Anthony Hood Chambers, *The Secret Window: Ideal Worlds in Tanizaki's Fiction*, Cambridge and London: Harvard East Asian Monographs, 1994, pp. 151-152）によると、戦前に日本の出版社から『白狐の湯』（1930年）、『蘆刈』と『春琴抄』（1936年）の英訳が刊行されているが、英米の出版社から一番最初に出た谷崎の本は1955年のサイデンスティッカー訳『蓼喰ふ虫 (Some Prefer Nettles)』で、現在までに『痴人の愛』以降の代表作はほぼ全て英語に翻訳されている（『聞書抄』が未訳）。チェインバーズ自身が、『武州公秘話』、『吉野葛』、『痴人の愛』、『蘆刈』、『少将滋幹の母』の訳者である。この他、『お艶殺し』の英訳が戦前の1927年に東京で出版されていたことが、グウェン・ピーターソンの編集した文献目録（Gwenn Boardman Peterson, *The Moon in the Water: Understanding Tanizaki*,

サイデンスティッカー、ドナルド・キーンの三氏を湯河原の湘碧山房に招いたりもしている。中央公論社『日本の文学 谷崎潤一郎』2巻と3巻の解説を担当したのもそれぞれサイデンスティッカーとキーンである（中央公論社なので谷崎自身の指名によって成立したのではないだろうか?）。このように谷崎は、日本文学は外国人には理解できない、というような変に依怙地な姿勢をとらなかった文学者である。海外の日本文学研究者との交際の輪はロシアにおける日本研究の泰斗ニコライ・コンラド（『和露大辞典』が不滅の業績）にまで及んでいる。谷崎とコンラドの出会いは昭和初期に起こったようだ。「現代口語文の欠点について」の中に、潤一郎が戯曲『愛すればこそ』のロシア語訳の件でコンラドから相談を持ちかけられるという場面が出てくる――

此の間左団次一行が露西亜へ行った時、あちらで歌舞伎劇の紹介を勤めたレニングラードのコンラド君が二三年前に来朝した折、コンラド君、同夫人、及び関西に在住する日本文学通の露人プレトネル君、ネフスキイ君、及び私と、奈良ホテルに会合したことがあった。その時のコンラド君の話に、今の露西亜で私の「愛すればこそ」を訳している人があるのだが、第一に此の標題の翻訳に困っている、「愛すればこそ」は、一体「誰」が「愛する」のですか、「私」が「愛すればこそ」なのですか、「彼女」がですか、それとも「世間一般の人」がですか、要するに主格を誰にしているかが明瞭でないと云うのであった。私はそれに答えて云った、「愛すればこそ」の主格は此の戯曲の筋から云えば「私」とするのが正しいようである。（20巻，191頁）

『愛すればこそ』の翻訳が実現したのかどうかは不明であるが、1929（昭和4）年に『痴人の愛』の訳本がコンラドの緒言付きでロシアにおいて出版されている（*Танидзаки Дзюнитиро. Любовь глупца. Перевод с японского Г. Г. Иммермана с предисловием Н. Конлада. Л.: Печатный двор гос. изд-ва. 1929*）。この本は日本語原語からの直訳で、海外における谷崎文学紹介としては最も早いものではないだろうか（しかし、その後のロシアにおける谷崎作品紹介はあまり進んでいないようだ¹）。しかも

Kawabata, and Mishima, Honolulu: University of Hawaii Press, 1992, pp. 113–115) から確認できる。

¹ 筆者が確認できた谷崎作品のロシア語訳は1929年の『痴人の愛』以外に以下のものがある。ただし、具体的にどの作品が収録されているかは不明である。標題だけから判断すると、①は『少将滋幹の母』他短編・随筆が収録。②と③は1986年に刊行された二巻本作品集であり、第一巻には『痴人の愛』・『陰翳礼讃』他短編が、第二巻には『細雪』全体が入っている。

① *Танидзаки Дзюнитиро. Мать Сигэмото; Повести, рассказы, эссе. М.: Наука, 1984.*

② *Танидзаки Дзюньитиро. Избранные произведения: В 2 т. Т.1. Рассказы; Любовь глупца:*

昭和の初めという、ソ連がまだ内戦と戦時共産主義の後遺症から十分立ち直っておらず、日本の干渉軍が北樺太から最終撤兵して間もない頃である。この逸話からもロシアの日本研究が革命前の学風を継承して非常に高度なものであったことが知れる。なお、引用箇所が登場する「左団次」というのは、小山内薫と提携して明治42年、自由劇場を創始した歌舞伎俳優の市川左団次（二代目）のことである。日ソ基本条約によって日ソ間の正常な外交関係が樹立されたのがようやく1925（大正14）年になってからであるにもかかわらず、昭和初期には、左団次がレニングラードで歌舞伎を上演したり、来日したコンラドが谷崎と会見して作品翻訳の意図を打ち明けたり、築地小劇場時代の小山内薫がスタニスラフスキイと書簡を交わし熱心にモスクワ芸術座の演出方法に関して照会したり、その小山内は昭和2年に革命十周年式典に国賓として招待されモスクワで歌舞伎について講演したりと、不思議なほど日本人とロシア人の間の文化交流が盛んであったことに驚かされる。

3. ロシア革命以前の谷崎のロシア物作品

以上から、おおよそ谷崎がロシアに関心をもつに至った素地というものが了解されたかと思う。さて、これから論を展開していきたい事柄は、作品中のロシア人描写に投射されている谷崎個人の主観的な西洋観と、作品の背景となっている日本とロシアを取り巻く客観的な歴史的状況についてである。初めに半自伝的な短編『独探』を検討し、これが発表された大正4年当時の作者の西洋に対する態度を探ってみたい。『独探』の語り手である「私」は高等小学校の時分にサンマー英語塾に通って英会話を習い（谷崎の伝記的事実に照応）、高等学校に入るとアメリカ人とドイツ人の教師の講壇に列したものの一向に会話力は上昇せず、つくづく自分に外国語を話す才能が欠けていることを痛感させられる。将来、芸術家として立ちたいという自負に燃えた私は、それでも欧米の小説を英語で読むというような研鑽は怠らないが、この程度の西洋の影響を持していれば過不足ないと意識している。しかし、しばらく経ると、自己の芸術上の要求が現代の日本に生まれ日本人に囲まれていては到底満足させられないことを直覚し¹、文学でも音楽でも絵画でも西洋のものであれば何でも貴いというような

Роман; Похвала тени: Эссе. М., 1986.

③ *Танидзаки Дзюнъитиро*. Избранные произведения: В 2 т. Т.2. Мелкий снег: Роман. М., 1986.

¹ 自己の芸術上の要求が現代の日本では満足させられないという結論に「私」（そして作者）が逢着するためには、個人内部のある固定した〈西洋〉像が前提とされる。谷崎の私的な〈西

極端な西洋崇拜へと急速に傾く。事ここに至って私は思う——

私は人間が神を仰ぐように西洋を見ずに居られなくなった。私は到底立派な芸術の育ちそうにもない日本の国に生れた事を悲しんだ。どうしても日本に生れる可き運命を持って居たのなら、政治家若しくは軍人として世に立たずに、特に芸術家として立たねばならなかった自分の不幸を悲しんだ。而も今日の私としては、ただ一步でも近く「西洋」に接触し、或は同化する事に依ってのみ、自分の芸術を切り開いて行かねばならないのだと観念した。(3巻, 234頁)

この告白をどのように受け止めればよいだろうか？ ここで露呈された心情は、紛れもなく卑屈なまでの西洋コンプレックスと一体化した西洋礼讃である。それに対し中村光夫は、「谷崎の西洋に対する心酔は、彼自身の云うようにその半生を貫いた激しい熱情であり、彼の芸術観そのものとも密接な関係を持っていますが、おそらく彼の抱いたすべての熱情と同様に、熱烈なわりに外面的であり、その知的な内容ははなはだ浅薄というほかはない」¹と評言し、一刀両断のもとに切り捨てている。しかし、中村の論難に反し、筆者は当時の潤一郎の立場に同情的で、むしろ彼を擁護したい。日本という島国の境界内において、(支那の影響を強く蒙った)自生の文化だけで不満を感じていなかった江戸期に突如として「黒船」という形の「西洋」が襲来した。日本国民の人心としては当然、疎遠な外来の西洋よりも慣れ親しんだ伝統文化を保守する姿勢に回り、尊王攘夷というイデオロギーを醸成させる。が、ひとたび倒幕がなされ、ガス灯や鉄道のような文明の利器が次々と生活面に滲透し始めると皆がこぞって西洋の優越を称え、廃仏毀釈のごとく自らの過去を払拭し西洋に同化することに血道を上げる。谷崎のような特異な個性の発展もまた近代日本が背負わなければならなかった歴史的条件の拘束を受けているのだ。明治19年生まれの谷崎はやはり時代の

洋> 像を形成した要因として、西洋文学からの影響も勿論あるだろうが、アメリカの日本文学研究者ケン・イトーは、潤一郎が「自分の芸術上の血族の一人」(『青春物語』)と認めた反自然主義者永井荷風の文学(特に『あめりか物語』)内において加工された<西洋>像の支配を指摘する(Ken K. Ito, *Visions of Desire: Tanizaki's Fictional Worlds*, Stanford: Stanford University Press, 1991, pp. 30-63)。荷風によって再建された<西洋>は潤一郎ばかりでなく、20世紀初めの日本で成年に達したほとんど全ての文学青年に大きな精神的感化を及ぼしたとするイトーの論点は極めて強靱である。

¹ 中村光夫『谷崎潤一郎論』(昭59・9, 日本図書センター), 146頁。

子であり、その精神遍歴も振り子のように極端から極端に移行した国家イデオロギーと軌を一にしていると筆者は主張したい¹。とりわけ彼は西洋の地で直接学び、局外から日本国家内部に巣食う矮小な西洋理解を相対化するという機会を持ちえなかったのだから。そして、谷崎の青年期における過剰な西洋拝跪にしても、中年期に達してからの伝統文化再考にしても、その時点その時点での自らの心意をあからさまに吐露した潤一郎の真率さこそを評価したい。

大正期の谷崎の西洋に対する憧憬の眼差しは、中村光夫の指摘する通り、ことごとく「感覚的な外面」に注がれた。特に白晳の肌^{はだえ}を具えた西洋人女性に対してそうであった。『饒太郎』の主人公も、「ああ己は西洋へ行きたいな。あんな荘厳な、堂々とした婦人の肉体を見る事の出来ない国に生れたのは己の不幸だ」（2巻、458頁）と長大息する。『独探』の私は、「金銭の不自由とか係累の拘束とか、^{あまた} ^{しっこく} 諸多の桎梏」（235頁）があるため洋行も移住も不可能であると観念し、手近にある西洋に接近することで我慢しようと心を決める。その第一手として、イタリア人の母とオーストリア人の父をもつGという元船乗りの西洋人のところへフランス語を習いにいくことにする。その後、銀座の裏通りでロシア人のバーが開業されたことを聞くと、早速友達を誘ってそこへ乗り込む。一階の酒飲み場でロシア人ホステスからあらん限りの嬌態を尽くされた私は気をよくして二階の寝室へ女を伴うが、^{しとね} 褥の上では「日本人ではとても親身^{しんみ}になれない。欺^{だま}かして金を搾り取ってやるだけだ」（261頁）という女の冷淡な態度にぶつかる。私はこれに懲りずに今度はGを連れてバーを訪れるが、帰宅の道すがら、Gから「露西亞の女は、みんなあんな野蛮な、無礼な獣ばかりです」（264頁）とたしなめられる。私の一人勝手な西洋幻想は、このようにさとしたG自身が胡散臭い正体不明のスパイ（独探）であることが後に判明することで見事に裏切られる。ここで興味をそそられるのは、Gの口を借りてチャブ屋で働くロシア人女性を「獣」と蔑み（『蓼喰ふ虫』で再現）、ロシアを「野蛮」な国と捉える（『細雪』で再現）谷崎の見方である。当時の谷崎の西洋に対する奴隸的賛美も、反面でこれを侮蔑的に見

¹ 例えば、森鷗外の歴史物に『津下四郎左衛門』（大正4年、「中央公論」）という小説がある。津下は尊王攘夷を至上価値とするために、明治2年、公武合体論者だったが共和制やキリスト教にも理解を示す開明論者横井平四郎を他の志士達と共に暗殺する。鷗外は津下を評するに、因循愚昧な猪武者という見方だけでなく、維新後に大学教育を修めることのできた四郎左衛門の息子を導入することによって、国内の急激な国家イデオロギー転換に順応できなかった悲劇的な日本人という視点をも供じている。複眼の人鷗外は、近代日本人が背負わねばならなかった困難な独自の歴史的条件を見逃さなかったのである。

下す視点を含んだアンビバレントな性質のものだったといえる。言葉を換えて表現すると、彼の西洋への視座は国家イデオロギーに由来する過大な西洋コンプレックスを背景としているため、あるがままに西洋の生態を客観化するという姿勢からは程遠く、相手が格上となれば諸手を挙げて誉めそやし、一旦、格下と分かれば容赦なく白眼視する容易に反転可能なものであった。この面で、中村光夫がいみじくも喝破したように、日本の自然主義もそのアンチテーゼとしての当時の谷崎の耽美主義も等しく私小説の伝統に息づいていたのである。

『小僧の夢』では、ぼんやりと芸術家になりたいと夢想している十六歳の洋酒店の小僧庄太郎が浅草六区で催される「露国美人メリー嬢の魔術」ショーを驚嘆の眼で観覧する。十二階や多数の活動写真館が立ち並び、「いろいろの新時代の芸術や娯楽機関のメルチング・ポット」（『浅草』、22巻、59頁）であった大正期の浅草の幻妖な雰囲気わたくしに包まれて展開される魔術ショーは、西洋人というものをじかに目にしたことがない小僧に「己が生れてから未だ嘗て経験した事のない、奇しく恐ろしい快感」¹をもたらす。ロシア美人メリーは、到達しがたい神秘なる存在である西洋の象徴として機能している。おなじく浅草六区を髣髴させるさる公園で演じられる不可思議な魔術ショーを扱った『魔術師』では、魔術使ましゆつかいの外貌が、「世界中の美人の産地と云われて居るコウカサスの種族に、いくらか近い所があるかも知れません」（4巻、110頁）と描写されている。コーカサスの種族というと、グルジアやアルメニアあたりのことを指しているのだろうか？ いずれにしろ、ロシア人女性は谷崎に芳烈なエキゾチシズムを搔きたてる対象であった。

4. ロシア革命と主要亡命ルート

『独探』や『小僧の夢』が発表された後の新暦1917（大正6）年11月にロシアで社会主義革命が起こった。『本牧夜話』以降、谷崎作品に現れるロシア人もすべてが革命に反対し、故国を落ち延びてきた白系ロシア人である。ロシア革命は大量の亡命者を産んだ。ノルウェーの北極探検家で第一次世界大戦後、新たに創設された国際連盟の難民弁務官を勤めたナンセンの報告によると、1920年代初期だけで約百万五千人のロシア人政治難民が祖国を後にしたという²。ここでロシア人亡命者がたどった経路

¹ 谷崎潤一郎『潤一郎ラビリンス5巻』（平10・9、中公文庫、中央公論社）、45頁。『小僧の夢』は愛読愛蔵版全集に未収録の作品。

² See: Boris Raymond and R. David Jones, *The Russian Diaspora: 1917-1941*, Lanham, Maryland and

について説明を加えておきたい。白系ロシア人は東西南北へ逃れた。北コースは、2月革命後に貴族・政府高官等が首都ペトログラードから国境の封鎖されていないフィンランドへ抜け（レーニンもこの道順で一時亡命した）、10月革命成立後は経済状況の悪化に耐えかねた多数の市民が非合法にフィンランドもしくは一次大戦後、独立国となったバルト三国に脱出した。西コースはポーランドから入ってドイツ、チェコ、フランスに至るもの。南コースは一次大戦中、ドイツ軍に占領されていたウクライナの首都キエフ、それから反革命政府の樹立されたクリミアに出るもの。クリミアの反革命政府の存立が危うくなると、そこから航路でトルコやバルカン半島や西ヨーロッパへと活路が求められた。最後に、日本までも達する問題の東コースであるが、これはユーラシア大陸を横断する延々たるシベリア鉄道の軌道上に展開された（避難民がロシアのヨーロッパ部から東へ赴いたという意味だけでなく、鉄道沿線全域で安全あるいは反ソ的だと思われる土地への人口移動が見られた）。

ウラル山脈の東側チェリャービンスクと極東のウラヂオストクの両端からシベリア鉄道の建設が着工されたのは1891年である（最後のロシア皇帝ニコライ二世は皇太子時代、ウラヂオストクでのシベリア鉄道竣工式に出席するための外遊の途上、日本で天津事件に遭遇する）。しかし、工事の困難とロシアの満州への野望のため建設計画は縮小され、とりあえず北満州を貫通するチターウラヂオストク間の東清鉄道、さらに中途駅のハルビン(哈爾濱)から分岐して遼東半島の突先の旅順まで伸びる南部支線が1903年に営業を開始する。チェリャービンスクーウラヂオストク間の全線が開通するのは日露戦争中の1904年で、戦後、ポーツマス条約により南部線の一部、長春ー旅順間の路線とその権益が日本に譲渡される。革命後、東コースをたどったロシア人亡命者は東清鉄道経営の中心地であったハルビンに殺到した。パステルナークの『ドクトル・ジバゴ』のコマロフスキイとラーラもウラルから満州へシベリア鉄道に乗って逃避する。満州の一都市であるハルビンは1898年に東アジアにおける南下政策と鉄道経営の戦略的拠点としてロシア帝政政府によって建設され始める。国際法上、ハルビンは中国に帰属したものの、定礎の初めから一貫してロシア人の町であった(実情としては、ロシア人は治外法権を有し、中国人住人のほとんどは労務者で一定区域に居住していたという)。1918年11月にイギリスの支援を受けてシベリア中部のオムスクに樹立されたコルチャークの反革命政権が1919年末に倒壊すると、大量の亡命者がハルビンになだれ込んだ(コルチャークはイルクーツクに撤退するも、翌年2

月に親革命パルチザンに捕らえられ銃殺)。

革命後のロシア政局混乱につけ込んでシベリア・満州進出を狙う日本政府が、1906年設置の関東都督府を関東庁と関東軍司令部(旧陸軍部)に分割し、ハルビンで専門的にロシア語教育を行う日露協会学校(ハルビン学院の前身)の創立を決定したのは1919年である¹。日本のシベリア出兵は、1918年1月の居留民保護を名目とするウラヂオストクに向けた日英共同の軍艦派遣から始まり、1925年1月の日ソ基本条約に基づく同年5月の北樺太からの最終撤兵まで継続した(計7年)。1918年8月にシベリア派兵の正式宣言がなされて以来、続々と日本の軍隊がロシアに投入され、ウラヂオストクに派遣軍司令部、ハルビンに陸軍情報機関が置かれた。ハルビン機関は革命後に白衛軍を組織していたセミョーノフを後援し、同年9月、彼の部隊とともにチタを占領、反革命地方政権を誕生させる。同時に、日本軍はバイカル湖以東の鉄道沿線地域を支配する。しかし、1918年末から日本軍は至る所でパルチザンの反撃に悩まされることになる。1919年3月に日本はセミョーノフをコルチャーク隷下に置き、オムスク政権への支持を決定するが、11月にオムスクが赤軍に略取されると形勢は次第に革命派優位に転じてくる。こうして日本軍は1920年3月からじりじりと東に押し戻される。その過程で^{にこ}港事件が発生した。アムール川河口の町ニコラエフスク・ナ・アムーレ(日本名尼港)は1918年9月に日本軍に占領され領事館も設置されていたが、1920年3月、多数のパルチザン部隊の襲撃を受ける。在留日本人とパルチザンの間に停戦協定が確立されたが、同年5月、日本の救援軍の到着が近いことを知ったパルチザン側は投獄されていた日本人軍人・市民を虐殺した(日本人死者は計約

¹ 日本ロシア文学会編『日本人とロシア語 ロシア語教育の歴史』(平12・10, ナウカ), 140頁参照。ハルビン学院の卒業生内村剛介氏の懐旧談によると(野崎詔夫・内村剛介・江川卓他編『露西亜学事始』, 昭和57・7, 日本エディタースクール出版部, 51-113頁), ハルビンの日露協会学校の開設を準備した日露協会は、国粋主義的政治結社「黒龍会」の創始者内田良平が政界要人に働きかけることで設立された。日露協会の初代会頭は榎本武揚, 二代目は寺内正毅, 三代目は後藤新平。日露協会学校は、当初、1901(明治34)年に上海に移された対中貿易関係の実務者養成学校「東亜同文書院」(1900[明治33]年設立の「南京同文書院」がその前身)を手本として、日露(日ソ)通商・交流従事者の成育という任務を担っていた(教育課程は本科三年制, 専修科一年ないし二年制)。学校は1920(大正9)年から教育活動を開始し、1932(昭和7)年に満州国建国が宣言されると、翌年、四年制の「満州国立哈爾濱学院」と改称され、満州国に移管、1945(昭和20)年に閉鎖される。25年の学校存続期間中、1412人の卒業生がここから輩出された。内村氏の述懐から判断すると、在校生の気風は大分、おどかなものであったようだが、日露協会と日露協会学校の存立の背景に北満州での利権確保を狙う日本の国家意思が働いていたことは否めないだろう。

730人)。尼港事件は当時の日本のジャーナリズムで大々的に喧伝され、軍隊のシベリア残留をもくろむ軍部に利用された。1920年10月、敗残のセミョーノフはモンゴルへ逃れ、11月には「赤い緩衝国家」である極東共和国が極東全体を掌握する。1922年6月、日本は遂に沿海州からの撤兵を決定し、10月、その最後の拠点であるウラジオストクが極東共和国に併合されるに至って、大陸での反革命勢力は掃討されることになる（しかし、日本の北樺太「保障占領」は1920年7月から1925年5月まで継続）。

一方、1920年代のハルビンは、劇場・高級レストラン・図書館・大学・正教会・出版社などを完備し「東洋のパリ」と称されるほどの空前の繁栄を呈して、西の1920年代前半におけるベルリン（その後はパリ）と比肩されるロシア亡命文化の一大中心地となる¹。亡命者の一部は1920年代にハルビンを経由してロシア正教会中国宣教団本部の置かれていた北京、あるいは上海・天津・青島等の中国沿岸都市に南下し、そこからさらにアメリカ（1924年5月以降、ロシア人亡命者受け入れの量的制限実施）・オーストラリア・カナダ・日本（ハルビンから南部支線で大連、大連から航路で神戸に行く道もあり）等へ赴いた。日本への入国経路は、中国から至る方法以外に、ウラジオストクから敦賀・神戸・南樺太のおとまりコルサコフ（日本名大泊）等に入港するものがあった。日本へはアメリカ・オーストラリア・カナダなどへのトランジットとして立ち寄る者がほとんどであったが、定住を希望するロシア人入国者に対しては1920年2月以降、一人頭千五百円以上の所持金を提示する義務が課された（但し、日本人保証人が存在する場合を除く）。しかし、入国審査にパスしても、一次大戦後の物価の急騰と職業を見つける困難さから日本を去る亡命者が多かった²。ハルビンにおけるロシア人の法的優越は、1920年3月から東支鉄道（東清鉄道は清朝滅亡後に改称）の実権が中国側に移ったことを契機として崩されていく。1924年に東支鉄道が中ソ共同経営化され、また1931-32年に満州事変が勃発し北満州が日本の占領下となるに従って、ハルビンは東の亡命文化の中核という地位を、当時、世界各国の銀行が軒を連ねていた東アジアの金融センターたる上海に明け渡すことになる。上海は租借地という性格上、国籍のない白系ロシア人にとって生活の点でいろいろと都合がよかつ

¹ See: Boris Raymond and R. David Jones, *Op. cit.*, pp. 47-51.

² См.: *Курама Юка*. Российская эмиграция в Японии между двумя мировыми войнами: динамика, численность и состав // Россияне в азиатско-тихоокеанском регионе. Сотрудничество на рубеже веков. Владивосток: Изд-во Дальневосточного ун-та, 1999. Кн. 2. С. 42-44; *Подалко П.Э.* Русские предприниматели-эмигранты в Японии в 1920-30-х гг. // Там же. С. 96-98.

た。昭和3年に『改造』誌上に上梓された横光利一の『上海』は昔日の上海亡命ロシア人社会の空気を伝えてくれる。

谷崎は大正7（1918）年11月から約一ヶ月半、中国へ旅行しており、その折に上海も訪れている。「天津や上海の整然たる街区、清潔なペーヴメント、美しい洋館の家並みを眼にしては、欧羅巴の地を踏んでいるような嬉しさを味わった。就中上海は当時の東京や大阪よりもいろいろの施設が遥かに進んでいて、もうその頃から四つ辻には交通巡査が立っていたし、近頃やうやう京都に出来た無軌道電車なども走っていたし、新たに拡張されつつあった郊外の方には、コンクリートの自動車道に並んで、馬の蹄を損ねないように柔かい土を盛った馬車道までが作られていた」（「東京をおもふ」、21巻、10頁）と谷崎は旅行時の感想を回顧している。西洋化された上海の風物はいたく彼の気を惹いたようだ。天津や上海を見たときの印象は、先にも触れた身近にある「西洋」に同化したいという谷崎の願望を強化し、彼は日常の衣服としては洋装を通し、横浜時代には、「山手の外人街に住み、アマ（「西洋人家庭に雇われた日本人女中」の意——筆者註）の部屋以外には畳の部屋が一つもない家屋に起居して、西洋料理のコックを置き、朝夕靴を脱いだことのない生活」（「東京をおもふ」、23-24頁）を実践した。大正12年9月、箱根で関東大震災に際会した谷崎は大阪に退避し、芦屋の友人宅に一時滞在する。爾後、横浜に残った家族も迎え入れて関西に住み着くようになる。ところで、震災直後の谷崎の気持ちとしては、「新しき東京が出来上るのを待つ間、腰かけのつもりで阪神の沿線に居を構え、古風な京都とハイカラな神戸とに生活の変化を求めながら暮らして行こうとした」（「東京をおもふ」、24頁）というものであった。神戸へは横浜で罹災した外国人のほとんど全部が移住し、彼らが通う社交場などもあり、谷崎は神戸を横浜の代替物にするつもりでいた。ところが、他方で、大正14年12月26日付けの上海の友人土屋計左右に宛てた書簡のなかに、「多分年内に（大晦日頃）上海へ遊びに行こうと思って居ります。（…）面白ければ一二月は居るつもりで、或は将来、上海と日本の両方に家を置き、往ったり来たりしようとする考えもあります。そうなれば或は家族もつれて行くかもしれません」（25巻、65頁）とあり、作家が上海移住も考えていたことを窺わせる。ともあれ、潤一郎における「西洋の植民地性」（中村光夫の評言）を代表していたのが、これら〈上海〉・〈横浜〉・〈神戸〉の三都市であった。それゆえ、作家のテクストにおいても、中国の租借地上海および日米修好通商条約に基づきそれぞれ1859年、1867年に開港した横浜と神戸は、植民地的西洋を表象する文学的トポスという役割を担っている。ロシア革命以降に書かれたロシア物である『本牧夜話』・『アエ・マリア』・『痴人の愛』・『一

と房の髪』・『蓼喰ふ虫』・『細雪』でも、ロシア人の現れる場所は前者四篇が横浜、後者二篇が神戸であり、作中のロシア人の多くが何らかの形で上海と関わりをもっている。

5. ロシア革命以後の谷崎のロシア物作品

戯曲『本牧夜話』と短編『一と房の髪』は作者定番の毒婦列伝であり、主人公の悪女役を振り当てられたのがロシア人という組み立てになっている。いずれの作品もプロット進行の動力源を三角関係に置いている。『本牧夜話』は複雑な二種類の三角関係を配し、その中心に位置するのがジャネット・ディーンという年齢二十一二歳、金髪碧眼のユダヤ系ロシア人で、現在、彼女はホテルの女主人であるアメリカ人の養女に納まっている（そのため名前が英米系）。その傍らに純日本人の初子とポルトガル人との合いの子である弥生という同母異父の姉妹がいる。舞台は「横浜本牧海岸及びその付近」（8巻、367頁）。ジャネットの経歴は、「どうせ上海あたりから買われて来たんだわ」（398頁）と弥生によって説明される。初子は日本人とアメリカ人の混血児であるセシルを夫に持っているが、セシルは公然とジャネットと不倫を重ねている。セシルの父は資産家で、父の死後に転がり込むはずの莫大な遺産を目当てにジャネットは彼と付き合っているのだ。弥生は、ジャネットに横恋慕する、これもまた日本人とアメリカ人の間に出来た子であるフレデリツキに懸想^{けそう}しており、恋敵^{こいがたき}のジャネットが憎くてたまらず、激昂のあまり硫酸をぶちまけようとするが、毒液は誤ってセシルの顔に降りかかる。怒ったセシルは劇薬の壘を初子に投げ、彼女はそれを満面に浴びる。この他に傷心の亡命ロシア人アレキシフという人物が登場する（ただ「アレキシフ」というのはロシア人の姓として変である。谷崎は英語表記の Alexiv を翻字したのだろうが、「アレクセーエフ」としななければならない。この場合のように彼の作品中の西洋人名にはしばしば不適切な表記が眼につく）。アレキシフについては、「露西亜を逃げ出して日本へ来てから、まだやっと一年足らずだって云うぢやないの。それに奥さんとは仏蘭西で別れてしまって、子供だのお母様だのも仏蘭西へ置いて来たんだって云うし、日本には知ってる人は一人もないんだそうだから、考えてみれば可哀そうだわ」（378-379頁）という特徴づけが施されている。アレキシフは夫を寝取られた初子をしきりに口説くが、硫酸事件以後は弥生に接近し、二人は夫婦気取りの間柄になる。同時に、ジャネットも悲劇の後にはフレデリツキと恋仲になり、彼と手を携えて上海に出奔することを計画している。その折、硫酸で顔を穢され悶々としてい

たセシルがかつての恋情を断ち切れず、ジャネットのもとを訪れて彼女をピストルで射殺し、自らの命をも絶つという場面で幕が切れる。作中、ジャネットとアレキシフという二人の亡命ロシア人を登場させたところなど、故郷を逐われ漂泊流浪の身である彼らの境涯に谷崎は強いエキゾチシズムを覚えたらしい。また、ジャネットのごとき美貌で、革命後、貧窮の悲境に甘んじなければならなかったロシア人女性という形象は、作家のロシア物中の一つのタイプを形成している（ステレオタイプであるが）。さらに評言を加えると、『本牧夜話』には数多くの西洋人との間の混血児（弥生・セシル・フレデリツキ）が登場するが、混血児のような「中間的存在」は潤一郎の想像力を大いに刺激したようだ。「混血児」以外にも、千葉俊二氏は、「谷崎文学には女性的な体質を誇る主人公が描かれていたり、男でありながら美しい着物を身にまとうことができる女性の境遇を羨む主人公が多く描かれたりしている」¹と指摘し、作家が影響を受けたオットー・ヴァイニングの『性と性格』を引き合いに出しながら、作中人物の両性具有性(androgyne), つまり男と女の間性に言及している。この他、大正期に執筆された小説（『人魚の嘆き』・『西湖の月』・『鮫人』・『肉塊』等）には「人魚」——人間と魚との中間的存在——のイメージが多く用いられている。このような潤一郎の中間的存在に対する関心は、東京の中心に生まれながらも故郷を田舎者に乗っ取られたという意識を持ち、日本人として上海・横浜・神戸の植民地的西洋にも完全に同化しきれず、震災後に夢を託した^{かみがた}上方でも自らを生粋の関西人でないと感じた（震災以降の作物に導入された関西方言ですら地元の人間に校閲してもらわねばならなかった）、自らをアイデンティファイする場所を終生、持ち得なかった曖昧な存在状況に対する自己認識から発しているのかもしれない。

アングロサクソン人種と日本人の混血児であるディックの一人称告白体の体裁を具えた『一と房の髪』も『本牧夜話』と似通った筋展開をなしている。ディックは同じ合いの子の境遇にあるジャックやポップと共に、「何となく斯う猥的なところに一種奇妙な魅力のある、そうしていつも、そのせいの高い真つ白な体へはうと眼につく衣装を着ていた」（10巻、499頁）亡命ロシア人のオルロフ夫人に熱を上げる。ディックがいつものごとく横浜山手のアパートの二階にあるオルロフ夫人の住居を訪ねたときに関東大震災が二人を襲う。衣装筆筒の下敷きとなって気を失ったディックはジャックに助け出される。正気を取り戻したディックは、ジャックによって寝台の柱に後

¹ 千葉俊二「解説 転換する性」（平11・6、中公文庫潤一郎ラビリンス14巻、中央公論社）、307頁。

ろ手に縛^{いまし}められたオルロフ夫人を発見する。彼女は地震が起こると、愛人から貢がれた宝石を掻き集め、ディックを置き去りにして家を逃れようとしていたところをジャックに捕まったのだ。ジャックは周囲を取り巻く火の手のなかでオルロフ夫人ともども焼身自殺を図る決心でいたが、その最中、彼女はディックとジャックの双方に内緒にしていた逢瀬用の一階の個室にボップが倒れていることを暴露する。ジャックによって屍骸となったボップが引き出されると、オルロフ夫人をわが掌中に得んとするため、ディックとジャックの間に争いが生じる。結局、ジャックはピストルでオルロフ夫人を撃ち殺し、続いて「己が勝ったぞ」と叫んで自らの胸に銃弾を貫通させる。一人生き残ったディックは忌まわしい過去を振り切るために上海へ渡ろうと考えている。——紛糾した人間関係を処理する谷崎の手際は小気味よい。オルロフ夫人の形容に幾度も使用される「獣」というイメージは、作家が描く娼婦型のロシア人女性に付きまとうライトモチーフをなしている。

谷崎の半生を貫いたさもしく底の浅い植民地的西洋への崇拜(独特な歴史的条件に制限された近代日本人のそれでもある)を総括する作品『痴人の愛』では、憧れの的である西洋の顕現物として元伯爵夫人アレクサンドラ(原著では「アレキサンドラ」の表記)・シュレムスカヤというロシア人のダンス教師が登場させられている。彼女の経歴は、「夫の伯爵は革命騒ぎで行くえ不明になってしまい、子供も二人あったのだそうですが、それも今では居所が分からず、やっと自分の身一つを日本へ落ちのびて、ひどく生活に窮していたので、今度いよいよダンスの教授を始めることになったのだそうです」(10巻, 70頁)と説明されている。彼女が稽古の際に、「ワン、トゥウ、トウリー——露西亞人の英語ですから“three”を“tree”と発音する」(74頁)という所などは、ロシア語を解さなかった潤一郎にしては巧みに描けている。主人公の河合讓治は徹底した西洋コンプレックスの持ち主で、浅草のカフェエの給仕をしていたアメリカの映画女優メリー・ピクフォード似のナオミを妻に引き取ったのもこれが動機になっていたと告白する——

若しも私に十分な金があつて、氣随氣儘な事が出来たら、私は或は西洋に行って生活をし、西洋の女を妻にしたかも知れませんが、それは境遇が許さなかったもので、日本人のうちではとにかく西洋人くさいナオミを妻としたような訳です。それにもう一つは、たとい私に金があつたとしたところで、男振りに就いての自信がない。何しろ背が五尺二寸という小男で、色が黒くて、歯並びが悪くて、あの堂々たる体格の西洋人を女房に持とうなどは、身の程を知らな過ぎる。矢張日本人には日本人同士がよく、ナオミのようなのが一番自分の注文に

嵌まっているのだと、そう考えて結局私は満足していたのです。(82-83頁)

讓治とナオミはシュレムスカヤ夫人の所へダンスを習いにいくことになり、ある時、讓治はシュレムスカヤ夫人と一緒に踊る機会に恵まれる。彼女の「白い手」が差し出されてその胸に抱きかかえられてしまうと、讓治は気が遠くなるほどの夢見心地を味わう。彼にとって西洋人女性の白皙の肌は触れるのも憚られるくらい神々しい畏敬の対象なのだ。今まで白と感じていたナオミの手ですら、シュレムスカヤ夫人の手を見た後の讓治には「どす黒くさえ」(84頁)思われる。目にあまる不行跡ゆえに一旦は家から逐い出したナオミを彼が許すのも、荷物を取りにきた彼女の体からシュレムスカヤ夫人を想起させる香水の芳香が漂っていたことが一因である。「ああこの匂、……海の彼方の国々や、世にも妙なる異国の花園を思い出させるような匂、……これはいつぞや、ダンスの教授のシュレムスカヤ伯爵夫人、……あの人の肌から匂った匂だ」(269頁)。何でもナオミの命じるがままに行動する痴人と化した讓治は、ナオミの希望に従い大森の文化住宅を引き払って横浜の西洋館に移り住む。そこでナオミは帳の垂れた天蓋付きの寝台がある大きな個室を占領し、思うがままアマを顧使し、流暢な英語を武器に数多くの西洋人と浮名を流す。

『痴人の愛』の作者は完膚なきまでに日本人の西洋コンプレックスと融合した西洋跪拜の深層心理を描き切った。ただ、思うに、讓治がひれ伏す西洋人婦人の代表としてロシア人女性が扱われたことは、実際のロシア人女性の側からは光栄としていいのだろうか？ もしかすると本当のシュレムスカヤ夫人は快活で気さくで人情味に富む人物であったかもしれない。しかしそうなると、『痴人の愛』の芸術世界は完全に潰つぶえてしまう。崇拜する偶像はあくまでも語り手の恍惚や賞賛というような感情の一人相撲に材料を提供するだけの感覚的外面的存在でなければならないのだ。内面を具えてはいけない。その点で、〈美人亡命者〉、〈元伯爵夫人〉、〈ロシア人〉というようなシュレムスカヤ夫人に伴う形容は、作品中の数多くの映画俳優の名と同様、空虚で内実を欠いた、せいぜい大正期の宣伝文句程度の「記号」にすぎないことになる。

6. 白のイデア論から陰翳美学まで(『アエ・マリア』と『陰翳礼讃』)

『痴人の愛』以前に発表された『アエ・マリア』は、大正年間に横浜で暮らす亡命ロシア人の日常の様子が描かれていることと、谷崎研究者の多くが指摘する「白のイデア論」が表明されている(これに関連して例の幼少時代のイコン体験が語られている)

という点で、実に面白い作品である。『アエ・マリア』は劇団女優の早百合子に呼びかけるといふ形を採った「私」ことエモリの一人称独白体（谷崎の十八番）で構成されている。エモリはかつかつの生活を送る独身の中年小説家として設定されている。時代は第一次世界大戦が終わってから間もない頃である（1918〔大正7〕年11月以降）。私は最近まで同棲していた早百合子から捨てられ、気分転換のために横浜に引越ししようと思っている（この手記も早百合子に宛てた実際の書簡というよりも、自らの心を慰めるための手すさびとして綴られる）。エモリはミセス・Wとニーナが住む横浜の一軒家の一部屋を借り、かくして女二人と男一人の共同生活が始まる。若いニーナは純粹の亡命ロシア人であるが、彼女がペトログラードにいた時分からの友達であるミセス・Wはイタリア人で、「何でも二人は一二年前にシベリヤから来」（8巻、533頁）たとなっている。しかし、この設定には無理がある。先に説明したように、2月革命当時、ロシアとフィンランドの国境は閉鎖されていなかったし、ポーランドから西ヨーロッパに抜ける道筋も確保されていたので、なぜ首都に滞在していたイタリア人が母国に帰還しなかったのかという疑問が生じる。エモリが密かに想いを寄せるニーナは、日本の物価高に耐え切れず、「上海に行けば知っている人も多数いるし、いいビジネスが見附かる」（542頁）と語り、近々、上海へ移住することをもくろんでいる。エモリはニーナを誘ってゲイティー座へアメリカの活動写真を見にいくが、そこでも「ああニーナ！ お前の体は今あの亜米利加のヴァンパイアの肌の光明に包まれている！ 彼女の白い靈魂がお前の上に照り渡っている！」（560頁）と内言し、恒例の白人女性礼讃を忘れない。しかしながら、ニーナには同じ横浜に住む許婚のロシア人将校というれっきとした恋人があることが判明する。この将校は「ジェネラル・セミヨノフの友達」（571頁）で、現在は貧乏をしているが、シベリアで「近いうちにポリシェヴィキと戦争をする」（573頁）ことになれば、金を儲けられると説明されている。これから推理すると、コルチャーク軍が壊滅した後、日本の軍部がチタに盤居するセミヨノフの勢力に希望をつないだ1920年初め頃の話だろうか？ なお、このセミヨノフは1922年にアメリカや横浜に滞在した後、第二次大戦終りまで日本の援助で大連に居住していたが、終戦時にソ連側に逮捕され、1946年、モスクワで銃殺刑に処された。やがてニーナと将校とミセス・Wの三人が上海へ出帆する日がくる。エモリはやむなく横浜のアパートの一室に移転する。

語り手が海を見渡せる高台の空き地をそぞろ歩く場面で、そこに遊ぶ外国人の子供達を細かく描写している箇所が出てくる。子供達は、「露西亞人でもないようだけれど、戦争以来あの地方に流れ込んでいた欧州の片田舎の国々の人々、波蘭土とか、チ

エッコとか、バルカン半島の諸国とか、そんな所の、まあ火事で焼け出されたと同然な不幸な種族であるらしかった」(564 頁)とエモリは推測する。が、ポーランド人やチェコ人やバルカン半島の民族がシベリア鉄道を伝わって日本まで落ち延びてきたとは想像しにくい(彼らの国々は第一次大戦後に独立国となった)。やはり、谷崎自身が目撃したに違いないこれらの子供達はロシア人だと考えられる。風俗史的な観点から、当時、日本に住居していた亡命ロシア人がどのような生活状態に置かれていたかを知る上で興味深い史料でもあるので、ここの描写を引用したい。

夕方になると此の近所を散歩したのだが、鉄の門の中にあるその空き地ではいつも子供たちが自転車などを乗り廻して遊んでいた。それは大概そのアパートメントに泊っている外国人の子供たちなのである。夏のせいでもあるだろうが、みんな素肌にした一枚の裾の短かい服を着て、膝頭の上の方まで飛び出ているのに靴下も穿かないで、はだかの脛をむき出しにした儘、ひどいになると下駄を穿いているのさえあった。その服と云うのも極く粗末な縮みか何かの、ピンクかグリーンの派手な色の褪めかかった奴で、髪を振り乱した女の児などがバンドを締めてそれを着た恰好を遠くから見ると、とんと絵に画いた寒山拾得の形だった。そしてその中には十六七かと思われる年頃の娘なども交じっていた。彼等はいずれも栄養不良のせいでもあろうが、痩せて血色が悪くて、顔の輪郭や骨格から判断すると歐洲種に違いないが、皮膚の色が黒ずんでいる上に、腕だの脚だのに疥癬のような紅い細かな吹出物があったりして、日に焼けたのか、垢でよごれているのか、それとも有色人種との合の子なのか、何にしてもみすぼらしい哀れな様子は、活動写真や小説にあるジプシイ達の漂流の民だのを連想させた。(563-564 頁)

これらロシア人の子供達は日本で正規の教育を受けていたのだろうか(前述したハルビンでは革命後も従前と変わらずロシア語教育を行う小・中学校が存在した¹)? 1920年2月にコルチャーク軍が滅ぼされると、日本政府は定住希望のロシア人政治難民に対して一定所持金提示という形の入国制限を設けるが、彼らの親達はそれ以前に日本を訪れたのだろうか。貧困生活に陥っているとはいえ、日本にいる亡命ロシア人はどのようにして生計を立てていたのか? ちなみに、横浜市統計省の資料によると、横浜のロシア人居留者の数は1916年47人、1917年166人、1918年338人、1919年

¹ 左近毅「ハルビンのロシア人高等教育機関について」(『ハルピン学院とその周辺 上智大学ロシア研究シリーズ(10)』所収、平11・2、上智大学ロシア語学科)、30-32頁参照。

503人、1920年660人である¹。亡命ロシア人は北から函館、東京、横浜、神戸の四都市に集中し、大震災前には横浜が最も多かった（震災後は神戸）。

エモリが新たに入ったアパートにも窮迫した亡命ロシア人が群居し、ゴーリキイの『どん底』に出てくるような貧民窟の様相を呈している。例の空き地で遊んでいた子供達の一人にワシーリイ（作中では「ワシリー」の表記）という数えで七つになる男の児がおり、あんまり垢だらけで臭いので、エモリは彼を捕まえて湯に浸かさせてあげる。「きたない着物の下にある白いぷりぷりしたものが……あの肉塊が非常に可愛らしい」（588頁）もののように思えて、エモリはワシーリイを好きになる。彼は幼少の頃から自分には「白」に対するフェティシズムというものがあつたことに気づく。子供の時分、彼の家には赤と白の相撲の人形があつた。エモリは最初、赤の人形をひいきにしていたのだが、八犬伝の芝居で「女に変装した一人の色の白い美少年が、赤い顔をした強そうな館の主^{やかた あるし}を切り殺す」（590頁）場面を見て以来、あらゆるずるい手段を弄して白を勝たせるようになった。「私」の偏執はその後も様々なものに向けられたが、一貫してそれらの背後に透かし見える「白」を思慕したのであつた。「白」こそ本質であり、その時その時の愛着の対象はこの「白」を内含した単なるヴァリエーションに過ぎない。

私の「白」を崇拜する感情は、あの人形を知る以前から、恐らく私が生れた時から、たしかに心の中にあつた。そして最初に、あの人形をたまたまその現れとして溺愛したのじゃないだろうか？（…）つまり「白」と云うのは私の生命が永久に焦れ慕って巳まないところの、或る一つの完全な美の標的、——まあ、強いて名づければそうでもいうより外はなからう。そこでその正体は容易に ぬかないものだからして、猶更それが みたくなる。どうかしてその姿を眼の前に見、手を以て触れて見たいと願う結果、その思いの切なる余りいろいろな物が「白」に見えたのだ。尤も「白」に見えたとは云っても矢張それらの物の中に幾分か「白」の本質があつたに違いない。本質と云って悪ければ、一つの本体から投げるところのさまざまな影でもあつたであろう。（596頁）

この述懐には大正末期の谷崎が傾倒したプラトン哲学からの影響がある。真実在たる形而上界のアイデアの影は現象界の諸物に分有されており、人間は感覚器官を通してこれに触れることで出生以前の本体の世界を想起するという考え方が、「白」に適用

¹ 同.: *Курата Юка*. Указ. соч. С. 47.

されているのだ。ただし、プラトンが主張するアイデアは愛や道徳といった観念であり、一方、「白」という色彩はあくまでも光のスペクトルの分化によって受容される感覚的な表象に過ぎない。この点で谷崎の発想とプラトン哲学には少々、ズレがある。

エモリはワシーレイとの縁がきっかけとなって彼の姉ソフィアに近づく。彼女の口から、「ペトログラードにいた時分にはいろいろな物を持っていたけれど、そこを追い出されてハルビンへ行ったり、北京へ行ったり日本へやって来たりするうちにみんななくしてしまったのよ」(599 頁)と家族の現況が解説される。金髪で碧い眼をもち、跛足であるソフィアはグノーのアエ・マリアを歌って聞かせてくれる。エモリはソフィアの顔を見ると、亡き祖父の隠居所にあった「マリアの像」を思い出さずにはいられない。「当時私は、一種の云い知れぬ畏れと賛嘆とを以て、その^{ひとけ}人気のない部屋の中にある聖母の姿を仰いだ」(601 頁)。彼はニーナやソフィアの容貌の中に「マリアの像を灰かに感じ、今も昔と同じような畏れを以て、及びも付かぬ高さにあるものを仰ぐように眺めていたのだ」(602 頁)。つまり、マリア像を崇拜するように「白」の顕現者であるニーナやソフィアを仰視するのである。ここには、期せずして、ウラヂーミル・ソロヴィヨフの詩にある「神智ソフィア София-Премудрость」の形象と共鳴する叙情がある。ソロヴィヨフもまた「ソフィア」の具象化として、白い肌、金色の髪、碧い眼という属性を用いている(谷崎は知らなかっただろうが)。

日本の谷崎論者は『アエ・マリア』の「白のアイデア論」だけを取り上げるが、「白」は作品中で「褐色」や「茶」や「黄」と対立的に用いられていることに着目する必要がある。「あの(=ニーナの)白い肌の中にある白い心は、此の(=私の)褐色な肌の中にある褐色な心の恋からは、とても及ばぬ高い所にあるのではないだろうか？」(540 頁)、「私はお前の(=ニーナの)その美しい白い体が、何処へ行っても茶色の顔と茶色の家とがうようよして居る日本の街に、斯うしてくすぶっていくのを見るに堪えられなかった」(546 頁)、「此の骨ばった醜い指であの真っ白な手の甲に茶色のしみを付けることの耻かしさ」(同頁)、「十本の茶色の指が、わななきながら真っ白な肌の聖地を冒しにかかる」(549 頁)、体を洗うのに白い肌の西洋人が白い泡の立つシャボンを使うのに対し、「黄色い肌の人間はやっぱり黄色い糠の方がいいのかも知れない」(585 頁)。以上から明瞭なように、作者の意識構造として、「白」という「或る一つの完全な美の標的」を分有した世界(ニーナやワシーレイやソフィア)から黄色人種である視点人物の「私」は絶対的に排除されている。美の世界から外的に絶縁されている視点人物がそれを内的にのみ占有する過程を一人称独白体という形式でもって語るという構造は、伝統回帰後の反現代物(『盲目物語』・『春琴抄』・『聞書抄』

等)の鑄型となっている¹。作家が好んで日本の歴史に作品の素材を索めたのも、封建時代の絶対的な身分制度の存在がこの構造を実現するのに都合がよかったという事情がある。

しかし、ここで大きなジレンマが生じる。作家の精神営為上の決定的な転回を用意した一因と筆者が考える、個人的で深刻なジレンマである。それは、西洋人女性が実現する「白」の美的世界から絶対的に疎外されていると自己認識している黄色人種の谷崎が、今後、同じ黄色人種である日本人の女を題材として美的世界を^{こんりゅう}建立できるのかという疑義である。『痴人の愛』で見たとおり、ナオミの「白」とシュレムスカヤ夫人の「白」は質的に異なっている(と作者は考える)。「白」を美と感応してしまう自意識にとって、黄色人種の女性の肌に映える白さは白人女性のそれに較べて劣るものなのだろうか? 少なくとも、〈西洋人女性が放つ「白」の美に黄色人種は決して届くことはできない〉という命題と、〈黄色人種である日本人女性の「白」の美を称える〉という命題とは決して両立しえない。この問題が解決されぬうちは、女性をあがめ、それを文学創造の根源的な力とする潤一郎に日本回帰は不可能であった。

谷崎が出した答えは、後年に『陰翳礼讃』(昭和8-9年)でまとめられることになる「絶対的な白」と「相対的な白」という二項対立の視角である。これは作家が白人女性と黄色人女性の「白」の質的な相違という考えを究極まで押し進めた末に得られた一つの発見であった。『陰翳礼讃』で展開されている論理は、『蓼喰ふ虫』以降に実践されてきた自らの審美観の具象化経験を踏まえた成果としての出来合いの理論とい

¹『盲目物語』・『春琴抄』・『聞書抄』は純然たる一人称独白体ではなく、いずれも「注釈者」という存在が導入された複雑な語りの構造を具えている。しかし、それらのテキスト中に一人称体も採用されていることは紛れもない事実である。筆者が思うに、谷崎はさんざん一人称独白体を使いこなしたので、これに飽き、古典回帰以降の作品では、古典の注釈者という視点を招致することによって、語りの織物の内で一人称独白体をより重層化させることに意を注いだ。また、歴史物といえども、谷崎は完全にオリジナルな想像力によって構成された虚構の創造を目指したので、史実に忠実であることを期した 外の史伝物とは異なり、注釈者が典拠とせねばならない先行テキストを仮構化させる必要が生じた。あるいは、仮構の先行テキストに忠実である注釈者を創出して史伝物のパロディを造ったと言えるかもしれない(『春琴抄』と『聞書抄』の注釈者は、鷗外の史伝物同様、作者=谷崎を想起させる語り手として設定されている)。『盲目物語』中の最後の奥書以外の全テキスト(『盲目物語』)、『春琴抄』中の『鶯屋春琴伝』、『聞書抄』中の『安積源太夫聞書』、『少将滋幹の母』中の『滋幹日記』)というような仮構テキストの措定は、注釈者が導入された語りの構造に起因する必然的な結果であると筆者は観じる。注釈者による三人称体と告白者による一人称体の並置という谷崎の志向は、『卍』のような現代物にも活かされている。

う形で提示されているので、谷崎が生涯にたどった思考のプロセスを理解しない限り、読者を誤読に導くことになる¹。潤一郎の思考は、まず白人女性と黄色人女性の「白」は等価であるのかという疑念から出発し、次に前者の「白」は純一無雑の性質であるのに対し、後者の「白」は闇や翳を自らの内に取り込むことによって引き立つ相対的な性格をもつという結論に達し、最後にこの完全に個人的な美意識を東洋の伝統文化の埒内にある多様な事物に適用することで一般論化を図った、という経路で進んだ。しかるに、『陰翳礼讃』の論理手順はこれとまったく逆である。ここでは、第一に、つるつるに光ったタイル貼りのトイレと薄暗がりの^{かわや}厠、ガラスと障子、ペンに適した西洋紙と墨汁に向けた奉書や^{はくとうし}白唐紙、西洋のピカピカに研かれた銀の器と支那の古色蒼然たる^{すす}錫の器や日本の漆器、電気の照明と^{あんどん}行燈というような二項対立を持ち出し、既に完結した谷崎の審美観の例示から話を始めている。そして、これらの例証から西洋の「絶対的な白」と東洋の「相対的な白」という結論を抽出するように仕向け、『陰翳礼讃』の中盤過ぎになって初めて、おずおずと文楽の女人形をダシにしなが、潤一郎の最大関心事である女の話に移行する。この後で漸く、「われわれとても昔から肌が黒いよりは白い方を貴いとし、美しいともしたことだけれども、それでも白皙人

¹『対談 谷崎礼讃——闘争するディスクール』（『國文学』、平5・12所収）において蓮實重彦氏と小森陽一氏が述べておられる『陰翳礼讃』批評——「ここで谷崎は、どうも言葉から出発しておらず、言葉を彼自身が漠然と持っているイメージのリプレゼンテーションとして使っている文章であって、その限りにおいてはどちらかという文学的ではなくて、ジャーナリストイックな感じがするんです」（蓮實氏）と、「私が『陰翳礼讃』を読んで一番感じるのは、あれだけ日本を馬鹿にした文章はないんじゃないかと（笑）、最初に読んだときに思いました。日本的な美を谷崎が発見したというふうによくいわれるんですが、とにかく最も惨めなじめじめしたものをことごとく取り上げながら、それを過剰に美的に描写しつつ同時にそれがどのように日本の生活の中で受け入れられるのか、それを受け入れる日本人の側のフェティッシュな感覚を捉えようとしている」（小森氏）——は、いずれも谷崎独自の根本的な問題意識とそこから発展した思考プロセスに眼を配っていないと筆者には感じられる。谷崎自身の審美観の発露という意味で、『陰翳礼讃』は日本文化論というよりも作家個人の芸術論に限りなく近い。前田久徳氏も、「日本美の本質を語るこの評論は、一般に理解されている文化論的側面以上に、谷崎の小説論として読まれるべきものである」（前田久徳『谷崎潤一郎 物語の生成』、平12・3、洋々社、164頁）という説を唱えられている。ただし、『陰翳礼讃』を純粹に日本文化論だけとして読むなら、二項対立による論理展開があまりに明快すぎるため、問題を著しく単純化しすぎてしまっていると筆者は思う。例えば、ここで用いられている「西洋」という概念の内容は極度に貧弱である。「西洋」なる言葉で谷崎が思い描いているのはせいぜい白人社会という程度で、評論のなかではラテン的文化、ゲルマン的文化、スラヴ的文化等の特質の相違は一切、捨象されてしまっている。

種の白さとわれわれの白さとはどこか違う。一人々々に接近して見れば、西洋人より白い日本人があり、日本人より黒い西洋人があるようだけれども、その白さや黒さの具合が違う」(20巻, 547頁)という、この論考を形成させる動因となった作家の初発的な疑念を開陳する。つまり、『陰翳礼讃』は後から前に読み進めないと谷崎の問題意識の所在が分からないような仕掛けになっている。とまれ、こうした思索を経て初めて、ほの暗さの対置によって発揮される日本人女性の「白」は、「少なくとも私が脳裡に描く幻影の世界では、どんな白人の女の白さよりも白い」(549-550頁)という、日本人女性の美の造型に船出する谷崎の堅牢な決意表明が生じるのである。換言すると、陰翳のコントラストを導入すれば、いくら己が白人女性の醸す美の世界から遮断されていようが、想像力の内部で黄色人種たる日本人女性を白人以上に白いものにすることができる、という論理の発案のおかげで、谷崎は先のジレンマから脱却でき、堂々と自信をもって日本人女性の美を謳歌することを可能にしたのだ。これは、両眼を潰すことによって視覚的な春琴の姿を完璧な観念像に転化できると信じた佐助の心理に似通っている。想像力による完全所有——。しかし、何度も繰り返すが、このような思考プロセス自体はあまりに個人的なものであり、潤一郎ほど女性美に鋭敏な感性でなければ、そもそもこうした問題設定も問題解決に至るルートもとらないと思われる。

7.近代日本人の自我分裂と黄禍論(過渡期の谷崎)

谷崎の内面における西洋と東洋(日本を含めた)の関係は二者択一のように受け取られることが多いが(それを傍証する作家自身の発言が非常に多いことも確かだが)、西洋崇拜でも伝統回帰でも、一方の価値を全否定し他方に乗り移ったというものではない。両者は絶えず闘ぎ合い、緊張を孕みながら精神内部に併存し続けた。『饒舌録』に出てくる有名な逸話だが、横浜時代の潤一郎の机上にはアメリカの映画雑誌と高青邱や呉梅村の詩集が並び、雑誌を開いてハリウッドの世界に想いを馳せても、その後「一と度び高青邱を繙くと、たった一行の五言絶句に接してさえ、その閑寂な境地に惹き入れられて、今迄の野心や活発な空想は水を浴びたように冷えて」(20巻, 93頁)しまい、創作意欲を沮喪させる自らの支那趣味を恐れたとある。こうした事情は谷崎にのみ限ったことでない。民族精神の連続性を分断する、突如として出現した西洋文明を消化するよう無理強いされた近代日本人の誰もが、地質の東洋と外来の西洋の間を輾転反側する不安定さを孕んでいたし、その振幅が激しければ激しいほど「自

我分裂」の相は深刻化していったのだ。平川祐弘氏はこれを近代日本人が背負わねばならなかった「宿命」と捉える。「今日の日本人は、宿命としての西洋化——それは西洋化の方向に進んできたということであって西洋人になったということではない——の結果として、徳川時代の日本人とは同じとはいえず、さりとて西洋人でもなく、いわば混血児に似た一種の精神上的不安定感に悩んでいる。それだから、ある時は日本の伝統文明への帰属感を確認することによって自己同一性を保持しようとして、ある時は西洋の近代文明の摂取やその他の思想や文物の借用によって自己変革を試みようとする——そのような行きつ戻りつの運動は日本国民全体としても見られたし、また個人個人の精神の遍歴の中にも見られた現象なのである」¹。谷崎の経た紆余曲折した精神の軌跡もまた、近代日本の歴史的條件に規定された誰しもが通過せねばならなかった道程と言えるだろう。

ロシア物から外れるが、大正12年の『アエ・マリア』の「白のイデア論」と昭和3-4年の『蓼喰ふ虫』の「陰翳の美学」を結ぶ中間点（谷崎の過渡期）に位置する大正15年発表の『友田と松永の話』は、不出来な推理小説としてではなく、近代日本人が抱えていた精神の「自我分裂」の肖像として読まれるなら、真価を得るとと思われる。この著作では、谷崎に内在する反発しあう東洋と西洋への志向が、一個人中に潜む松永儀助と友田銀蔵という対蹠的な人格として形象化されているのである。『友田と松永の話』の主人公松永儀助は妻子を持った大和の国添上郡柳生村の堂上家の子息である。ある時、悪友の紹介によって横浜の白人売春宿で味わった歓楽を経験して以来、彼はあらゆる東洋趣味を呪うようになる。東洋趣味は「薄暗く」（10巻、471頁）、「引っ込み思案のヒネクレ主義」¹、「卑屈なゴマカシ主義」（472頁）と感じられる。「黄色い国に居れば居るほど、自分の顔が黄色くなるような気がした」（同頁）彼は、上海経由で巴里に遊学する（谷崎の洋行願望の実現）。巴里では享楽主義者が夢想できるすべての快樂を翫賞した結果、みるみる肥え太り、日本人の知人ですら見分けのつかないぐらいになる。そうして自らをジャック・モランと名乗り、国籍不明の外国人に成り済ます（西洋同化政策）。しかし、神経症に襲われた彼は、仄明るい行燈のよとの妻の寝顔、生家の油煙で黒ずんだ天井、つつましやかな三弦の音色、朝な朝なの味噌汁の匂いなどが恋しくなって日本に舞い戻る。その途上、やはり西洋を思い絶つことができず、友田銀蔵という名をかたって東京や横浜の白人売淫窟に出没しだす。家族のもとへ帰ると、以前の陰鬱で口数の少ない「松永儀助」に変わり、親子三人で

¹ 平川祐弘『和魂洋才の系譜 内と外からの明治日本』（昭62・3、河出書房新社）、10頁。

三十三箇所詣でに出掛けたりして療養に努める（体も瘦身に戻る）。それでも、神経症が恢復した途端、彼はまたもや家を飛びだし、豪放磊落な友田銀蔵となって放浪生活に入る。今度は上海へ渡り、ピンブ（男妾と女術を兼ねた商売）を始める。友田の体は元の通り肥満化してくる。それからホワイト・スレーブの斡旋業を志して横浜に行く。四年周期の体型の変化が訪れるとまた妻子の所へ里帰りする。数年たつと、以前の西洋崇拜熱が再び萌して、前の売淫窟に現れる。度重なる渡航で資産を蕩尽した友田は、近々、神戸で白人娼家を開くことを企図している。『友田と松永の話』で筆者が感じるのは、谷崎の西洋観にしる日本観にしる、フェティシユなまでにある特定の土地に密着しているということだ。西洋は〈巴里〉・〈上海〉・〈横浜〉・〈神戸〉と結び付けられ、日本は〈大和〉で代表される。神経症に陥った松永は、「三月になれば月ヶ瀬の梅が開き、四月には吉野の花が綻び、五月には奈良の藤の花が咲き、若草が萌える」（486 頁）故郷で心を癒す。谷崎が敢えて松永の故郷を大和の国に設定したのは、『幼少時代』や『雪後庵夜話』で語られている歌舞伎「義経千本桜」への愛着が背景にあったかもしれない。また、この作品で試みられた大和路の叙景は『吉野葛』のそれに連続している。

谷崎の精神内で拮抗していた西洋と日本が次第に後者の方へ傾いてくる原因として、上方の風土が気に入ったこと、中年期からの心境の変化、松子夫人との出会い、文楽の発見など様々な説明が可能だろう。ここでは、従来のものとは一風、毛色の変わった視点を筆者は提案してみたい。それは、日露戦争前後に西欧で湧き起こった黄禍論とこれと微妙に連動する形で醸成されていった日本の国家イデオロギーが作家に及ぼした影響である。太平洋戦争中、ひたぶるに『細雪』の執筆に余念がなかった谷崎はおよそ政治的な人間と程遠い作家であるが、それでも明治・大正・昭和初期当時の平均的な日本人が持っているぐらいの政治意識というものはあった。森鷗外が「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」という講演で、黄色人種を劣等とする西欧の人種偏見思想を日本に紹介したのは日露戦争前夜の明治 36 年の 6 月と 11 月である（軍人外が大陸における日露の利害衝突を念頭に入れて、西洋の対日観の一片を客観的に日本人に解説しようとする試みだった）。東西の一般世論において、日露戦争はまずもって白人対黄色人という構図の人種戦争として受け取られた。通常日本人の側からしては、世界の権勢を恣にする白人に隷属されたアジアがこれに掣肘を懲らすという気分が根強かったであろう。府立一中五年生のときに日露戦争を迎えた谷崎がこれに感奮し、「起てよ、亜細亜」なる韻文詩を校内誌に寄稿したのも、当時の平均的な愛国少年の熱情以上から出たものではない。その中に表われる、「權威に誇る白人が、かよ

わき民の血をすすり毒の剣を振う時、欧亜の土に撼しし成吉思汗の霊いかん」(24巻, 97頁)や「亜細亜の救世主^{くせしゅ}, 神の御子^{みこ}すめら大君太刀とりて 文明の仇, 世界の敵, 蛮露を討てと起ちたまう」(99頁)というような語句から, 往時の谷崎が徳富蘇峰や岡倉天心等の日本を盟主とする大アジア主義の感化を蒙っていたことを窺わせる¹。

日露戦争に勝利し, 着々と大陸での権益を固めていく黄色人種の国日本に対し西洋は多大な脅威を感じ, 様々な言説のなかでそれを露出していく²。特に, 戦争に敗北したロシアでは, 19世紀末から20世紀初頭にかけて日本を標的にした黄禍論が根深く滲透した。末期のソロヴィヨフ(『三つの会話』と『反キリストの物語』)とこれに影響されたロシア後期象徴主義者の文脈において, 「第二のモンゴル襲来」のイメージは終末論と結合されている。西洋の黄禍論に対抗する形で, 日本の国家イデオロギーが次第に国粹主義的な色彩を帯びるようになったという見地がある³。日露戦争後の明治・大正期の欧米で排日運動を巻き起こり(大正13年にアメリカで採択された新移民法として公法化), 大正8年のパリ講和会議では日本が「人種差別撤廃」の議案を提出したものの承認されなかったという出来事のように, 西洋中心の国際社会でアジアの新興国たる日本が孤立を深めていったことは事実である。これに対し, 国内のイデオロギーは自己防衛の姿勢を強くしていった。とりわけアメリカの移民法に弱腰で臨んだ幣原外交は西洋反発の世論を掻き立て, 昭和6年の満州事変勃発の導火線

¹ しかし, 岡倉天心に関しては, 英文で書かれた彼の最初の書『東洋の理想』(原著名“The Ideals of the East with Especial Reference to the Art of Japan”)がロンドンで刊行されたのが明治36年のことなので, 日露戦争勃発時の谷崎がこれを知り得ていたかどうかは甚だ心許ない。

² 該論文では, 西欧で生じた黄禍論とこれに対する日本の対抗イデオロギーの詳説を避けるが, 前者についてはゴルヴィツァー著『黄禍論とは何か』, 後者に関しては橋川文三著『黄禍物語』が詳しい。西欧の黄禍論は日清戦争後の日本の大陸進出から徐々に形成され, 日露戦争の勝利によってその絶頂を極め, 太平洋戦争発端まで継承されていく。ゴルヴィツァーが紹介している日露戦争前の黄禍論リストの一部を挙げると, 1896年, ベルリンの雑誌『クリティーク』に小説家クレーヴスの論文「黄色人種の脅威におびえる白色人種」, 同年, 『ルヴュ・ジェネラル』誌に銀行家アルフォンス・アラールの論文「黄色人種の脅威」, 1897年, 『ルヴュ・ポリテイク』誌に仏高官ルイ・ヴィニヨンの論文「黄禍」, 1900年, 『デイリー・ニューズ』紙に新聞記事「黄禍が深刻のきわみに達したとき」が掲載される(ハインツ・ゴルヴィツァー『黄禍論とは何か』, 平11・8, 草思社, 41-43頁)。

³ 橋川文三氏はその著作『黄禍物語』(平12・8, 岩波現代文庫, 岩波書店, 170頁)のなかで, 「日本を動かした政治思想の流れ——満州侵略にともなう『王道主義』, 日中戦争開始にともなう『東亜共同体論』, 太平洋戦争の展開にともなう『大東亜共栄圏論』などを貫く一定の理念を『黄禍』, 『白禍』という人種論的文脈において把えることは必ずしも不可能でない」と述べられている。

となる。昭和に入ると、かつて谷崎が打ち出したような西洋人女性の「白」への跪拝（大正期の悪魔主義の看板の下では看過されたが）を表明すれば、石もて逐われかねない風潮が横溢していたと思う¹。「白」崇拜は、西洋人の帝国主義的植民地化を正当化するための金科玉条となったキプリングの詩『白人の重荷 The White Man's Burden』（1899〔明治32〕年発表）の論理を容認しかねない弱点があった。この頃、西欧の独善的な政策に憤慨を感じる日本国民の少なからぬ部分が自らの民族の尊厳を保証してくれるような言説を索めた、という流れがあったことは容易に否認しがたい。

このような情勢下で、昭和2年に上梓された『饒舌録』中の「西洋に打ち勝つことは出来ない迄も、少くとも東洋は東洋だけの文化を発達させなければ、東洋人は生きて行かれないと云う気持ちを、近頃特に痛切に感じる」（20巻、91頁）という谷崎の言

¹ この筆者の見解に対する有力な反証が河野多恵子氏によって提じられている——「昭和三、四年というその頃、純日本的なもの、古風なもの、古典的なものは、時代おくれのもの、価値なきもの、無知なるものとして見下げる久しき凡その支配的風潮はより行き渡りつつあったほどだ。ハイカラやモダンとインテリと金持とが常に一致するとまでは思わなくても、一致しがちなものであり、少くともハイカラやモダンはインテリとまず一致するものであるかのように思い、更にそれは東京文化的なものであるように思うのが、世俗の風潮だったのである。それは又、文化とは現代文化のことであり、現代文化とは西洋文化のように感じる風潮でもあった」（河野多恵子『谷崎潤一郎文学と肯定の欲望』、昭51・9、文藝春秋社、194頁）。さらに河野氏は、『夏菊』（昭和9年）の妻が買う化粧品がゲランなどの舶来品で、『卍』の柿内夫人は「プロフェッサア」という外来語を使い墮胎の知識を英語の本から得、『細雪』の妙子は湯殿に浸かりながらラジオの洋楽放送を聞くという「物証」を挙げられている。しかし、たしかに昭和初期の日本で西洋趣味は汎く流布していたかもしれないが、対外的には伝統文化礼讃の気風が風靡していったと筆者は考えている。特に大正13年の米国排日移民法制定は国内の反西洋的イデオロギー形成の転機をなしたと推測する。晩年の谷崎は毎日、英字新聞に眼を通していたというから、昭和初期においても西欧の反日感情には夙に気が付いていたと思う。誤解のないように書き添えておくと、筆者は谷崎が国内言論右傾化のお先棒を担いだと主張しているのではない。戦後に書かれた随筆「所謂痴呆の芸術について」中の「この間の戦争中も、あらゆる文学芸術に不当の圧迫を加えるよりほか脳のなかつた軍閥政府は、義太夫の時代物と文楽の人形浄瑠璃と一部の歌舞伎劇だけは、国粹芸術であるとかいって大いに奨励したものであったし、当時の国民もまたそういう政府の尻馬に乗って、文楽座を世界に誇るもののように宣伝し、また実際にそう思い込んでいる風でもあったが、私は実は内心甚だ苦々しくも、滑稽にも感じていた次第であった」（21巻、351頁）というような発言から推して、潤一郎が軍国的言説の蔓延に警戒心を強めていたと想像される。とはいうものの、大正末年から勃興してくる対西欧的に自国の民族的尊厳を確保しようとする国内イデオロギーの風潮に彼も知らず知らずのうちに感染し、『蓼喰ふ虫』からの作風転換につながる一つの遠因をなしたのではないか、と筆者は言いたいのである。

葉が、当時の国家イデオロギーの感染を全く経ていなかったと断言するのはむしろ難事であるかもしれない。『饒舌録』の別の場所では、「思えば西洋人はおせっかいをしてくれたものだ。畢竟われわれは滅ぼされても構わない気で東洋主義に執着するか、でなければ全く西洋主義に同化するか、二つの岐路に立たされているのだ。此の意味に於いて東洋人は呪われたる運命を^{にな}荷っていると云わねばならない」(99頁)と述べられている。西洋か東洋か、いずれか一者を選択せねばならないという切羽詰まった気持ちに谷崎を至らしめた一要因として、西欧社会のなかで集中砲火を浴びる孤立悄然たる日本という時代背景があったのではないだろうか？ 筆者は、「白のアイデア論」から伝統回帰までの過渡期(大正末年-昭和初年)に谷崎がことさら東洋、そしてその一部としての日本へ固執していく態度の中に、黄禍論を背景として対西洋的に日本擁護の立場を深めていく国内言論の一般的趨勢からの影響を覩ずにはいられない。日本社会の右傾化傾向と並んで、ロシア革命と日本軍のシベリア出征後に東洋の各地で目撃されることになったロシアの白人貧民(the poor White)の姿が、維新後、国家イデオロギーの圧力で西洋崇拜一辺倒を叩き込まれてきた国民にこれまでの西洋観の変更を促すという潮流もまた存在した¹。『友田と松永の話』で友田がホワイト・スレーブの売買に従事するという展開は、国内の西洋観が明治初期に較べて大分、変質してきていることを示す証左とも言えよう。

8.日本の永遠女性像創造(『蓼喰ふ虫』)

昭和3年から「大阪毎日新聞」と「東京日日新聞」紙上で連載の始まった『蓼喰ふ虫』が、谷崎の半生を貫いた西洋と日本の緊張関係という問題側面からの重要な転回点を画す作品であることは衆目の一致するところである。不惑を越した作者は浩然の気をもって日本の「永遠女性」像をこの書で造型しようと志した。彼は古今を通じて我が国の文化的伝統内に遍在しているある理想的な女性の俤があると感じるに至り、それを自作中において形象化したいという欲望に駆られたのだ。『饒舌録』において、潤

¹ 橋川文三氏の前掲書のなかに、英国人日本研究家リチャード・ストーリィ(オックスフォード大学)の著書からの以下のごとき引用(164頁)が見出される。「シベリア出兵の経験は、それまで日本の将兵がヨーロッパ人に対して抱いていた尊敬の念を消滅させた。多くの貧困化したロシア人亡命者たちがハルビンや天津や上海に氾濫している情景を見て中国人もまたヨーロッパの優越という神話を永久に捨ててしまった。同時に、シベリア出兵は日本軍の若い士官たちのある者に、謀略と政治的操作に熟練する機会を与え、それがその十年後、満州占領の後に大いに活用されることになった(Richard Story, *A History of Modern Japan*, 1960)」。

一郎自身が日本の「永遠女性」について説明している箇所があるので以下に引きたい。

旧時代の日本の女性は喜怒哀楽に際しても、恐らくあの（人形芝居の——筆者註）物静かな人形の顔以上に露骨な表情はしなかったであろう。真に東洋風の慎ましやかな幽婉な婦人を戯曲に描けば、歌麿の美人がどれもこれも同じ顔をしているように、結局のところいくら描いてもタイプ以上の個性を出すことは出来ないであろう。過去の東洋人、——仏教や武士道で鍛え上げられた昔の日本人に取っては、ただ永遠に「一人の女性」があるのみである。（20巻，129頁）

谷崎の「永遠女性」像の確立は、千葉俊二氏の所説に依れば¹、大正末期のプラトニズム追及の果てに見出された「タイプ」という考え方と文楽の人形芝居の発見によって準備された。個物に分有されたアイデアとしての観念というプラトンの発想形式は、浄瑠璃人形に顕れる普遍的な日本女性のタイプという着眼を作家にもたらし、日本文化に通底する「永遠女性」像を自己の文学で創造しようとする動機となった。蛇足ながら、もし理想的女性像の形成がプラトン哲学の影響下に行われたのであれば、谷崎はそのアイデア的観念に「永遠女性」という言葉でなく、ゲーテやソロヴィヨフが用いたように「永遠に女性的なるもの (das Ewig-Weibliche, вечная Женственность)」の呼称を与えた方がより適切だったと思う²。

伊藤整は『蓼喰ふ虫』の世界を、①「別離を予期する要と美佐子の日常生活と従弟の高夏秀夫のこと」、②「美佐子の父とお久と古典芸術の趣味的世界」、③「ルイズを中心とする要のモダニズム的異国趣味」という三要素に分割し、「この三つの要素が、この作品の中で細かく織り合わされないで、ほとんど別個な三つの作品を結びつけたように書かれている」³と指摘する。筆者はこれと意見を異にする。筆者の観点では、三要素を代表する美佐子、お久、ルイズという三人の女性の関係は、〈美佐子—お久〉、〈お久—ルイズ〉という二種の対立図式に細分され、これが〈美佐子—お久—ルイズ〉というお久を中軸とする左右相称の対立式にまとめあげられている所に『蓼喰ふ虫』の構造的美観が存する。従って、この作品は谷崎に根強い二元論的思考法に基づいて

¹ 千葉俊二『谷崎潤一郎 狐とマゾヒズム』（平6・6，小沢書店），79-123頁。

² 橋本芳一朗氏は、谷崎文学に現われた「永遠女性」像とゲーテの「永遠に女性的なるもの」やボードレールの理想女性との比較を試みられている（橋本芳一朗『谷崎潤一郎の文学』，昭和40・6，桜楓社，227-238頁）。

³ 伊藤整「解説」（新書版『谷崎潤一郎全集 第十六巻』，昭和33・7，中央公論社），287頁。

組み立てられており、三者乱立の三つ巴^{どもえ}からではない。物語の進行もお久と他の二人との対立構図を強調しながら、〈美佐子—お久—ルイズ〉という順に各人物が小説に挿入されている。また、これら三人の女性の懸隔は彼らが使用する言葉の面からも特徴付けられる（美佐子の杓子定規な東京弁標準語、お久のゆったりとした京都弁、ルイズの外国人に特有な少し変な日本語）¹。〈美佐子—お久〉対立式は「個性」をめぐって展開され、〈お久—ルイズ〉対立式は作者の根源的な問題である「白」を媒介としている。二種の対立図式は、結局、日本の「永遠女性」像創出という作者の合目的的な意図の下に、〈お久〉というそれを仮託された中心的な形象を浮き立たせることに収斂されていく。当時の谷崎の個人生活上における最大関心事である「離婚」というテーマも、最初の〈美佐子—お久〉の対立式を招来するため有効なプロット展開の方法というだけで、『蓼喰ふ虫』の芸術的価値を保証するものではない（それゆえ、物語発端の役目をなした離婚という話題が決着を見ぬまま小説は終局してしまう）。

詳しく見てみよう。『蓼喰ふ虫』には甚だ緩慢ながら次のような筋の流れがある。

①主人公ス波^{とほ}要と彼にとって性的対象でなくなった妻美佐子との家庭内離婚状態の現状提示、②美佐子の父の勧誘に従って、義父、その妻妾お久、要、美佐子の四人が観劇する文楽芝居、③上海から一時帰国した従弟高夏秀夫の離婚準備のための両者折衝、④義父、お久、要の淡路行き、⑤ルイズが現れる神戸の娼家、⑥離婚の趣旨を認め^{したた}た要の手紙に対する義父の返信と、その結果としての夫婦の老人宅訪問、⑦料亭へ娘を説得に連れ出した老人の不在中に要とお久が過ごす時。〈美佐子—お久〉の対立式は①—④で明らかにされ、⑤以降は〈お久—ルイズ〉のそれに移行する。まず、第一の対立図を検討してみる。①—④の過程で、美佐子は、要と同じ東京生まれで、マニキュールを塗るために爪の手入れに怠りなく、劇の幕間^{まくあい}にはすかさずコムパクトを取り出して化粧直しをし、自宅の西洋館に起居し、毎朝食にはトーストと腸詰と酢漬^{すく}けの胡瓜^{きゅうり}をとり、神戸にフランス語を習いに行った折りには阿相という恋人までこしらえる「ハイカラな」現代女性として描かれている。河野多恵子氏の考証では、小説の

¹ 谷崎は女性の用いる言葉の面でも、東京より関西の方へ「性的に」惹かれたらしい。「東京の女の声は、(…)キレイといえばキレイだけれども、幅がなく、厚みがなく、円みがなく、そして何よりも粘りが無い。だから会話も精密で、明瞭で、文法的には正確であるが、余情がなく、含蓄がない。大阪の方は、(…)どんなに調子が甲高くなっても、その声の裏に必ず潤いがあり、つやがあり、あたたか味がある」(「私の見た大阪及び大阪人」, 20巻, 364頁)。ただし、お久の言葉は京都弁である。

時代は「昭和二年か三年の春先から梅雨入り頃までの数ヵ月」¹に設定されているので、美佐子は青春時代に大正デモクラシーを経験した所謂「モダンガール」ということになろう。外面的な西洋趣味だけでなく、彼女は心情的にも進取的で、夫の提議した協議離婚案にも首肯し、「古い習慣とか、義理とか、情実とか、そう云うものに対してはむしろ要よりも勇敢であった」（12巻，14頁）。一言でいうと、美佐子は大正期の個性尊重の風のもとで育った自己主張を持った女性である。これと大きなコントラストを描く形で、美佐子の父の妾であるお久は、着付けや味付けなどの老人の細々とした注文に唯々諾々として従う、古来の慣習を何の疑問も持たずに受け入れている旧套な女性として醜取りされる。要は個性を明確に打ち出す現代女性の美佐子には性的不能を覚え、文楽の女人形小春（②の場面）に表現されているような「容易に個性をあらわさない、慎み深い女」（23頁）に惹かれる。彼は、「この人形の^{はる}小春こそ日本人の伝統の中にある『永遠女性』のおもかげではないのか」（同頁）と思い、「いつもは眠たいような、ものうげな顔の持ち主であるお久の何処やらに小春と共通なもののあること」（24頁）を感じる。つまり、要は西洋文化に汚染された強い個性の持ち主である美佐子に対してではなく、日本の伝統に沁み込まされた個性の乏しいお久に性的な感興を抱くのである。

なぜ要はお久のなかに伝統的な日本女性の普遍的な形象を感じ取るのだろうか？これは彼の〈淡路〉体験で詳説される。封建時代の風情を濃厚に残した淡路島（上方文化の周縁部）において、要は「暗い家の奥の暖簾のかけで」、「文楽の人形のような顔立ちを持った人たちが住み、あの人形芝居のような生活をしていたのであろう」（124頁）と想像する。彼の想像力によって復元される古代絵巻のなかでは、「今から五十年も百年も前に、ちょうどお久のような女が、あの着物であの帯で、春の日なかを弁当包みを提げながら、やはり此の路を河原の芝居へ通ったかも知れない。（…）まことにお久こそは封建の世から抜け出して来た幻影であった」（124-125頁）として、お久的な女性が点ぜられることで往昔の光景の全幅が完成される。要は、美佐子とその感化を受けた西洋文化の来襲する以前の日本の古をユートピアと観じ、そこにノスタルジーを誘われ、このような伝統の直系の子孫ともいべきお久という典型的な封建女性に性的に魅了されるのだ。彼の理想とする古代は、「徳川時代の文明は調子が低い、町人が生んだものであるから、どこまで行っても下町情調が抜け切れない」（33頁）という近親憎悪ともいえる作者の否定的評価を与えられた旧幕江戸文化では

¹ 河野多恵子，前掲書，79頁。

ない（初期の『象』や『刺青』に顕著な江戸趣味に対する谷崎の態度転換）。それは江戸期以前の日本である。淡路で邂逅する郷土芸能としての人形浄瑠璃は、「徳川時代よりも一時代前の戦国か室町ごろの物語を読むような」あるいは「平安朝のようでもある」（133 頁）という印象を主人公にもたらず。近代の自我分裂を惹起した西洋の到来より遙か前の統一的な日本の原風景を思い起こさず「人形のような」（140 頁）お久は、それゆえに伝統文化の「永遠女性」像たりえるのである。これに反して、親西洋、反伝統的な美佐子は性的嫌忌しか要に催させない。

さて、『蓼喰ふ虫』の作者は、西洋かぶれした美佐子と純日本女性（と作者が考える）のお久を対立させるばかりでなく、お久と西洋人ルイズの対置関係を設ける。これには谷崎を悩ました「西洋人の白」と「黄色人の白」の質的な違いという問題意識が後を引いている。要が通うイギリス人の女主人が経営する売春宿での馴染みルイズは、「朝鮮人と露西亜人との混血児」（148 頁）と述べられている（「ルイズ」という名前は仏語風なので恐らく源氏名であろう）。彼女は、「戦争で国を追われて、露西亜にも居、満州にも居、朝鮮にも居、そのあいだにいろいろの言葉を覚えたとかで、外の二人の露西亜生れの女とは自由に露西亜語で話した」（148 頁）とある（この娼家で働く女性は今では合の児かロシア人だけになったと記されている）。この設定はなかなか穿っている。なぜなら、1910 年の日本の朝鮮併合以来、これに反対する朝鮮人が多数ロシアの極東部に逃れたからである（ウラヂオストクは朝鮮独立運動の一大拠点だった）。また、亡命ロシア人の一部は中国から日本支配下の朝鮮半島にも渡っている。ルイズはその出自に由来する「何処やらに濁りを含んだ浅黒い皮膚」（148 頁）を隠すためにいつも全身に薄い白粉おしろいを引いている（『痴人の愛』のナオミも横浜に移ってから体中に白粉を塗りたい）。彼女は混血児ではあるが西洋人として自らを意識し、谷崎の二項対立の一方「絶対的な白」の信奉者なのである。自分をことさら白くみせかけようとするルイズの描写は、白い皮膚をもった黄色人女性がその白の中に残った微かな翳りを消そうとして「露出している肉体のあらゆる部分に濃い白粉を塗っている」（20 巻、548 頁）という『陰翳礼讃』の記述に照応する。要がルイズのもとに通うのは、「西欧の生れであると云うことに或る特別な幻想とあこがれ」（156 頁）を抱いているからだ。しかし、「女というものは神であるか玩具であるかの孰れか」（97 頁）とする要の女性観に従えば、ルイズは彼にとって玩具がんぐでしかない。彼はルイズを「四肢ししと毛なみの美しい獣けもの」（149 頁）として捉え、情事が済むたびごとに「きつともう来ないぞ」（155 頁）と心に誓う。ルイズから身請けみうけを相談されても、「ハルピンあたりへどろんするのが落ちであろう」（154 頁）と高をくくっている（ルイ

ズの部屋にアメリカの映画スターと並んで「岡田嘉子」の写真が飾られているのは予言的といえる)。肉体的には要はルイズに魅惑されているものの、彼女はお久のような精神的安堵感をもたらす存在ではない。この点で、ルイズは要の跪拝の対象とはなりえないのである。

作品では、ルイズの代表する「絶対的な白」に対し、「相対的な白」を基盤とする日本の陰翳美が対抗させられている。それは、美佐子を伴って要が義父を訪れる終盤場面で集約的に露呈される。老人の家には、要の自宅のタイル張りの浴室に対する豆ランプ大の電燈が点った薄暗い釜風呂（「長州風呂」）、真っ白な西洋式トイレに対するほの暗い雪隠が設備されている。いずれも老人の趣味に叶った普請と語られているが、『陰翳礼讃』で表明されている作家の嗜好を忠実に反映した細部の施しである。この陰翳をもった家にお久と二人きりで取り残された要は、「すでに第二の妻を迎えた自分の新居であるような愚かしい空想」（179 頁）が湧き上がってくることを禁じえない。要の安心立命の心境は、自己内部における西洋と東洋の葛藤に長年、懊悩させられてきた作者が到達した結論とも取れよう。家の四囲を深々と夜陰が領するなかで、行燈の幽かな光に照り映えながら人形のようなくお久が唐突に出現する最終場面は、「白」をめぐる〈お久ールイズ〉の対立式を解決する処事の方法として絶妙であり、『蓼喰ふ虫』全体の構成上の力学という観点から見ても論理的必然と思わせるくらい極めて鞏固である。「襖が明いて、五六冊の和本を抱えた人の、人形ならぬほのじろい顔が萌黄の闇の彼方に据わった」（185 頁）という段落替えされた最終一文は、日本の「永遠女性」像創造に向かった作者の野心を戦慄するくらい見事に実現している。読者の心内に燈される闇を背後にしたくお久の顔の「ほのじろさ」は、どこまでも白い。作者は、美佐子に精神的〈西洋〉を、ルイズに肉体的〈西洋〉を配備し、両者を別個にくお久と対峙させ、それぞれの対立式において主人公要がくお久に強く牽引されていく心理過程を追跡することによって、自らの日本回帰をここで宣言したのだ。

9.『細雪』のロシア人描写

谷崎のロシア物の掉美を飾る『細雪』は、それ以前の作品と異なり、ロシア人の真実な生態を描き出している。『アエ・マリア』のソフィアにしろ、『痴人の愛』のシュレムスカヤ夫人にしろ、『蓼喰ふ虫』のルイズにしろ、どこか作者の観念の傀儡という印象を拭い切れず、ロシアの文芸史家ミハイル・バフチンの用語を使うなら、著し

く「モノローグ的」な人物形象であった。しかるに『細雪』では、作者は自己の観点を押し売りするような真似はせず、自己から切り離して登場人物のあるがままの生の姿を冷徹に写し出そうという姿勢が感じられる。『細雪』が西欧の主要な近代小説に見劣りしない本格的なリアリズム小説であると筆者が考える由縁である。谷崎は『細雪』によって日本文学の私小説わたくしの羈絆きはんから脱皮し、リアリズムへの行程を歩み始めたのではないだろうか？ 永井荷風も『細雪』論評において、その作風の「客観的」であることを賞賛し、作品をフロベールの『ボヴァリー夫人』や『感情教育』と同列視している¹。同時に、『細雪』から初めて、谷崎はかつての徒らな西洋崇拜やその反動としての西洋蔑視という立場から解放され、自らの眼に映る西洋（あるいは西洋人）を虚心なく捉えるという中立的な立場に方向転換した。『細雪』の西洋人描写が以前の西洋崇拜物に現れるそれと本質的に異なるという作者自身の発言もある²。なお、『細雪』に対してはこれを風俗小説と見なす解釈があるが、それは作品の内容を問題としているのであって、作者の描写態度を指しているものではない。

『細雪』には亡命ロシア人のキリレンコ一家とドイツ人のシュトルツ一家という外国人家族が登場する（他に、シュトルツの一族がドイツへ帰国した後に、その家に越してくるスイス人のボッシュ夫妻が出てくるが、作中で重要な位置を占めていない）。いずれの家族も貞之助と彼に庇護された三姉妹、娘悦子と心の温まる交流を遂げる。作品の連載が開始された昭和 18 年当時、このような形で日本人と外国人の接触を小説に描くということは極めて異例に属したらしい³。さらに注目すべきは、貞之助一

¹ 「細雪の作風は純然としてまた整然として客観的の範囲を厳守している。明治以来わが現代の小説中、その作風のかくのごとく整然として客観的なものはいまだかつて見られなかった。(…) 細雪は余の見るところその客観的なことはけだしフロベールのボヴァリー夫人、感情教育の二大作に比するも遜色なきものであろう」(永井荷風「細雪妄評」、『日本の文学 19 永井荷風(二)』所収、昭和 40・6、中央公論社、79 頁)。

² これは『座談会 谷崎文学の真髓』(『文芸臨時増刊 谷崎潤一郎読本』所収、昭和 31・3、50 頁)で伊藤整の質問に応じる形で『細雪』の作者によって吐露されている。二人の会話を以下に掲げる。

「伊藤 (…『細雪』になりますと、ちゃんとした感じで外人の小さな家庭なんか出て来ますね。ああいうのは、やっぱり同じような感じで(以前の西洋人崇拜の傾向を引きずって—筆者註)『細雪』にお入れになったわけですか。

谷崎 『細雪』の女は前のは全然ちがいますね。

伊藤 あの小説全体がちがう感じなものですから、そういう要素があつて、ああいう形が生かされる、というものじゃございませんね？

谷崎 ええ、そうじゃございません。」

³ 太平洋戦争直前の暗い時代背景の下で、『細雪』に描かれた等身大の西洋人像がいかに光彩

家との関係を通して西洋人家族の個々の民族性が浮き彫りにされていることである。以前の谷崎の十把一からげの西洋理解は超克され、冷静かつ中立的な観察眼は西洋に棲む諸民族の性格の相違にまで及ぶ。『細雪』は、戦前の大阪船場の日本人風俗と西洋人の風俗、そしてロシア人の民族的気質とドイツ人のそれ、という二種の鮮やかな対照から出来上がっている。特に後者において印象深いのは、生牡蠣を平気で食べる「野蛮な」ロシア人と武器のようにぴかぴかに研きたてられた食器を秩序正しく整頓する「謹厳実直な」ドイツ人主婦シュトルツ夫人とのコントラストである。シュトルツ(stolz)はドイツ語で「誇らしい、堂々たる」という意味だが、ゴンチャロフの小説『オブローモフ』では純ロシア人的な主人公の怠惰放縦と彼の友人シュトルツ(意図的にドイツ語起源の姓が付与されている)のドイツ人的まじめさが対比的に描かれている。谷崎は既に『オブローモフ』を読んでおり、これを基に「シュトルツ」という名を採用したのではないかと筆者は考えている。反面、このようなロシア人とドイツ人の民族的比較は著しくステレオタイプなものであることを指摘しておきたい(ドストエフスキイの『賭博者』にその典型例が出てくる)。しかし、穿った見方をすれば、谷崎はまさにこのステレオタイプこそを『細雪』で克明に記録しておきたかったのかもしれない。太平洋戦争による瓦解と戦後の全般的な大衆俗化に襲われる運命にある日本人旧家の醇風美俗とその文化の再現は、ステレオタイプへの偏執がなければ不可能であったと言える。三島由紀夫も、「花は桜、魚は鯛という月並みな感受性のうちに何がひそむかを証明した『細雪』のような作品は、文化とは何かを不断に答えてくれる作品となり、その女主人公きあんちゃんの幻影は、日本女性の永遠のオブスキュリティーの象徴となるであろう」¹と語っている。

貞之助一家とキリレンコ一家の交際を跡づけてみよう。余談ながら、キリレンコと

を放つものだったかを中村真一郎は次のように回顧している——「あの時代には、我々は外国人と交際し交通するだけで、憲兵から注意人物扱いをされた。明治の開国以来、最も攘夷的になった時期に、日本の小説が、外国人の群を主役の中に初めて登場させたことは、筆者には、殆ど狂人達の中に正常人を発見したような喜びである。外国人も又人類であると言う自明な事実が、文学作品の中で自然に描き出されるためには、西欧の人間に対する劣等感——明治以後の多くの西欧主義者や、東洋主義者や日本主義者や市民や民衆の中に根強く生長して来た感情——から解放されている自由人が必要である。西洋人が鬼であると言うポスタアやラヂオの声¹が国中を埋め尽している時、比の作者は、大阪の一市民の家族をロシア人の一家と会食させたり、その娘の小学生を隣家のドイツ人の娘とままごと遊びをさせたりしていた」(中村真一郎「潤一郎作品論・『細雪』」、『文芸臨時増刊 谷崎潤一郎読本』所収、昭和31・3、83頁)。

¹ 三島由紀夫『作家論』(昭7・6、中公文庫、中央公論社)、66頁。

いう姓はウクライナ系である。両家の家族の交流は、人形製作を仕事とする妙子のもとへある日、カタリナ・キリレンコ（「カタリナ」の名は「カチェリーナ」表記の方が適切）が自分も日本人形を作りたいと言って突然、来訪することから始まる。現在、カタリナは老母と兄との三人で夙川の狭い文化住宅で暮らしている。キリレンコ一族の来歴は、もともとペテログラードのツァールスコエ・セローの宮殿に近い家で生活していたが、革命後、一家離散になったと説明されている。カタリナは祖母に連れられて上海に逃げ、そこでイギリスの学校に通い、卒業後、看護婦としてイギリスの病院で働いた。上海滞在中、彼女はイギリス人と結婚し娘を設けたが、その後、夫と離縁し、子供は父方に引き取られ、二人はイギリスに帰国した。兄と母は別行動で日本に到来し（兄は日本の中学校にも在籍したことがある）、後になってカタリナも神戸で家族と合流する。このような事情で、「娘は英吉利カブレしているが、兄と母とは非常なる日本崇拜で、家へ行って見ると、階下の一室に両陛下の御真影を掲げまつり、他の一室にニコライ二世と皇后の顔を掲げている」（15巻、112頁）となっている。伊藤整の綿密な『細雪』年表に基づく¹、小説の開初部に現われる雪子と瀬越との縁談が昭和11年11月の出来事なので、カタリナが妙子を初めて訪れたのは昭和11年かそれよりも少し前と推測される。つまり、満州事変以後である。カタリナは弟子入りして以来、妙子が仕事場とするアパートへ頻りに訪れるようになる。そのうちに妙子はキリレンコ宅の夕食に招待される。夕食時に、キリレンコ一族は酒を「ウィスキー用の小さなコップにいっぱい注いで、ぐいと一息に、飲むというよりは口の中へ放り込」（114-115頁）み（ロシア人はこのようにウオッカを仰ぐ）、料理には「支那のワンタンや伊太利のラビオリなどに似た、饅頭粉を捏ねたようなもの（ロシア料理「ペリメニ」——筆者註）が浮いているスープが出た」（115頁）と描かれている。このような描写は実際の習俗に正確で実に見事だ。

キリレンコ一家から再度、晚餐に招待された妙子は、今度は貞之助とその妻幸子を伴って彼らを訪ねる。ここでも食卓を囲んでの情景が描出される。日本人作家がことさら丹念に食事の場面を書き込むことは稀だが（トーマス・マンの『魔の山』では何頁にも涉って食卓の品目の描写が続く）、谷崎をこれを豊富な細部で彩っている。このような食事の場面の頻出や、小説全体を幸子の下痢で締めくくる肉体的「下層」への作者の執着（ロシア語の所謂"снижение"の効果）は、『細雪』にラブレのカーニ

¹ 伊藤整「解説」（新書版『谷崎潤一郎全集 第二十四巻』、昭和33・12、中央公論社）、212-213頁。

バル性を与えていると言つて言えなくもない（生涯、女と食物を愛した谷崎自身が日本に珍しいカーニバル的な人物であった）。だが、カタリナはなかなか食事の準備を始めない。これに不安を抱いた妙子らは間違つて訪ねたのでないかという強い疑懼に襲われる。が、時計が八時を打つとカタリナはいそいそと台所に立つ。ここではロシア人と日本人の生活習慣の違いが写し出されている。ロシア人は土壇場にならないと事を起こさないという癖がある。こんな所などは、作家が想像力だけで小説細部を補充したとはとても思われぬ。ドイツ人シュトルツ一家に現実のモデルが存在したことは松子夫人の告白で明らかにされているが¹、キリレンコ一家にもロシア人のモデルがあったのではないだろうか？ 食卓には、「鮭の燻製、アンチョビーの塩漬け、鯛の油漬、ハム、チーズ、クラッカー、肉パイ、幾種類ものパン」（121 頁）が並べられる。いずれもロシア人家庭に招かれたときの定番の料理である（目玉は肉パイ[ピローク]で、多分、前もってそれを焼き上げていたのでカタリナはすぐに食事の仕度に取りかからなかったのだろう）。食事中、カタリナの母と兄とその知人ウロンスキーが帰宅する。貞之助は、「ウロンスキーさんと仰っしゃるんですか、『アンナ・カレーニナ』の中に出て来ますね」（122 頁）と告げる。ウロンスキーとアンナ・カレーニナの熱愛物語への示唆は、その後のカタリナの運命の伏線となっているかもしれない。カタリナの老母は、「テーブルの上を一度片づけて、新たに自分が仕入れて来た生牡蠣や、イクラや、胡瓜の酢漬や、豚肉鶏肉肝臓等々の腸詰や、またしても幾種類ものパン等を並べた」（124 頁）。この晩餐の場面で、貞之助以下三人は日本人とロシア人の文化的相違を痛感させられる。「時々カタリナは手づかみで物を食べていたが、そんなところを偶々客に見つけられると真っ緒な顔するので、貞之助たちはそれに気が付かない風をするのに骨が折れた」（124 頁）と書かれている。さらに、貞之助らは生牡蠣を食するロシア人を見て、「生牡蠣とはいっても特別に吟味した深海牡蠣ではなくて、そこらの市場で買って来たものに違いない色をしているのに、それを勇敢に食べている露西亜人たちは、そういう点では日本人よりもずっと野蛮であると思えなかった」（124-125 頁）と感じる。こうした感想は、ロシア人の行動パターンに関する予備知識を持たない日本人が経験するごく標準的な反応である。幕府の遣欧使節に随行してペテルブルグを訪れた福沢諭吉も、それほど親しいわけでない接待委員

¹ 谷崎松子『倚松庵の夢』（昭 54・12、中公文庫、中央公論社）、70-71 頁。松子夫人の証言では、シュトルツ夫人の本名はフリーデル・シュルンボムといい、子供達の名は全員、実名であるそうだ。

の一人からいきなりロシア滞留を勧められ、「成程露西亜は欧羅巴の中で一種風俗の変った国だと云うが、ソレに違いない」¹という感慨を抱いている。

酒の酔いが回りだすと、カタリナと母は客がいるのも忘れてロシア語で親子喧嘩を始める。この口論がまた滅法、面白い。「何でも『お婆ちゃん』(カタリナの老母——筆者註)が英吉利の政策と国民性とを攻撃し出したのに対して、カタリナが躍起になって反対しているらしいのであった。カタリナに云わせると、自分は露西亜に生れたのだが、国を追われて、上海に来て、英吉利人の恩恵を受けて成人したのである。英吉利の学校は私に学問を教えてくれた、しかも月謝など一文も取りはしなかった、私は学校を出て看護婦になり、病院で月給を貰うようになったが、それもこれも皆英吉利のお陰である、その英吉利がどうして悪いことがあるのか、というのであるが、『お婆ちゃん』に云わせると、お前はまだ歳が若いからほんとうのことが分らないのだ、というのである」(127-128 頁)。ちなみにこのお婆ちゃんは、「帝政時代の露西亜の法学士で、偉いお婆ちゃんらしい」(113 頁)となっている。お婆ちゃんの Anglophobia は何に起因するのだろうか？ 現代のロシア人の間に反独感情(独ソ戦の名残)は見られても、反英感情というものは聞いたことがない。19 世紀以来、帝政ロシアは南下政策をとり、グルジア・アゼルバイジャン・アルメニア・中央アジア等を自らの領土に加えていくが、イラン・アフガニスタン方面でインド統治を行うイギリスと鋭く対立する。イギリスが「榮譽ある孤立」を捨てて日英同盟(1902 年)に踏み切るのも、日本の力を借りて極東部でのロシアの南下を食い止めようとする計算からだった。このような英露対立の背景があったことは確かだが、実際の利害衝突から戦争状態にまで発展したのは日露関係の方である。だから、お婆ちゃんは英国よりもむしろ日本を嫌った方が理に適っている。しかし、お婆ちゃんは自宅に「両陛下の御真影を掲げまつる」ほどの日本^{びいき}鼻真なのだ。このお婆ちゃんは感情的にしか物事を把握しない自然人たるロシア民衆の生きた形象と言えるだろう(但し、昭和 11 年頃に満州や日本に居留していた白系ロシア人のうちには、日本が満州を足場に極東・シベリア方面のボリシェビキを撃退してくれると期待する人達も存在した)。

この後、カタリナはルドルフというドイツ人の「いい人」を見つけ、ベルリンにいる彼の姉を頼って単身、船で欧州大陸に向かう(母と兄は日本に残留)。しかし、ドイツに定住するのが目的でなく、ベルリンを足掛かりにしてイギリスへ渡り元の夫から娘を取り戻すためである。現金も当座の費用ぐらいしか持ち合わせておらず、その

¹ 福沢諭吉『福翁自伝』(昭 29・6, 岩波文庫, 岩波書店), 133 頁。

後の生活の具体的な方針もない。「わたし欧羅巴に行ったら、きっとお金持の男見つけて結婚します」(481頁)というぐらいの計画である。ベルリンからロンドンに行った彼女は保険会社に社長秘書として勤め、娘を取り返すための訴訟を起こす。そして、遂に、その会社の三十五歳の青年社長と結婚し、訴訟に勝利して娘を迎え入れ、大邸宅に住む身空となる。これを聞いた幸子は西洋と日本の結婚観の違いにつくづくと思いを凝らす。「かりにも保険会社の社長で、大邸宅に住んでいる三十五歳という初婚の紳士が、つい半歳前に雇い入れたばかりの、身寄りもなければ氏も素性も全然分からない渡り者の一女性と結婚するなんて、たといその女がどんな美人であったにしても、日本の常識ではとても考えられない」(645頁)。ここでは、自らの力で積極的に運命を切り拓き幸福をものにしていくたくましいカタリナと、家柄を重んじるために徒に婚期を遅らせていく瞼の下にほんのりと陰翳を宿した雪子の両形象が鮮烈なコントラストをなしている。作者はいくつもいくつもの対照を重層させていくことで、作品の芸術世界を限りなく豊饒なものとしている。このような対位法 (counterpoint) に基づく小説製作の方法は、トルストイの大作群を髣髴とさせる。特に、谷崎が愛した『アンナ・カレーニナ』の中のヴロンスキイとアンナ・カレーニナの悲恋、レーヴィンとキティの幸せな結婚という対位法への連想を誘う。また、雪子の出て来る場面では決まって彼女の眼の下に浮き出た鬚りを連続させていく作者の描き方は、トルストイのライトモチーフの手法とそっくりである。崇拜するトルストイの肖像が置かれた机の上で書き進められたマンの『ブッデン・ブローク家の人々』でも、ハノーの母の眼元には必ず「青白い鬚」という形容が伴う。

『細雪』の下巻に至って、欧州では第二次世界大戦が始まる。絶え間ない独軍の空爆を受けるロンドンにあってカタリナはさぞ難儀な生活を強いられていることであろうと心配する貞之助一家は、「自分の家は倫敦の郊外で、独逸の飛行機が飛んで来る通路に当たっているので、毎日毎晩爆撃機の編隊が通り、盛んに爆弾を落すけれども、非常に深い完備した防空壕があるので、そこに電燈をカンカンつけて、ダンスレコードをジャンジャン鳴らして、コクテルを飲んでダンスしている、戦争なんてとても愉快で、恐いことなんかちっともない」(853頁)という彼女の言葉をキリレンコの兄から報告されて呆気にとられる。このようなカタリナの態度は根無し草的な亡命ロシア人の無責任さと受け取ることもできよう。自らをデラシネと観じている谷崎も、ときどきの政局の変転に意を介せず、あくまでも今ある人生を享樂していこうとするカタリナの態度には大いに共感するところがあったのではないか。

最後に、筆者の胸に大きな疑問が湧き上がってくる。雪子と御牧との縁談がまとも

るのが昭和16年1月で、貞之助と下痢に襲われた幸子が雪子^{はつ}を連れて上京する最終場面がその年の4月26日のことである。貞之助の下女お春どんがキリレンコの兄に遭遇してカタリナの近況を聞いたのは、昭和15年12月上旬とされている。日本が太平洋戦争に突入するのが昭和16年12月8日。アメリカ中心にA B C D包囲陣が策定されたのは昭和16年2月で、日米関係も険悪化の一途をたどっている。お春どんとキリレンコの兄とが出会った昭和15年12月上旬は、そろそろ日米航路の存続自体が危ぶまれるようになった時期であろう（日欧航路はいつ頃まで継続したのか？）。キリレンコの母と兄が一刻も早く日本脱出の一大決心をしなければ、戦時下の日本に取り残される運命になる。小説の幕引き後、彼らはどのように身を処したのだろうか？ それと、もう一つ気になるのが、さんざん雪子の縁談の世話を焼いてくれた理髪師井谷の運命である。彼女は昭和15年10月に技術研修のためにアメリカへ出航する。彼女が昭和16年12月前に日本へ帰国することができなかったならば、アメリカにそのまま残ったと推測できる。そうすると、彼女は戦時中のアメリカの日本人強制収容で生活するという憂き目に遭ったのではないだろうか？ 『細雪』の細部に非常な愛着を覚える筆者は、こうした要らずもがなの杞憂を催してしまうことを禁じえない。また、読者にこんな無用な心配を抱かしめるほど、『細雪』の人物形象は並外れた生彩を放っているとも言える。

10. 結論——エキゾチシズムの対象としての〈ロシア〉

筆者が考えるに、谷崎文学の創造原理として大きな役割を果たしたものの一つとして、「エキゾチシズム exoticism」がある。エキゾチシズムが作家の想像力の尽きせぬ源泉となったという傾向は、創作活動の緒に就いた『新思潮』時代から一貫している。エキゾチシズムとは、人間が常に現在、自己の置かれた状況に満足を感じえず、そこから遠く隔たった時代なり地理なりそれらの風物なりに憧れをもって志向するという精神の運動である。この点で、エキゾチシズムはユートピア的想像力の概念と重複するかもしれない。ユートピア的想像力は時間軸と空間軸の二側面に涉って展開される。谷崎は現在、自分が立脚している状況の中には「どこにもない場所」を、時間軸上では日本の過去、すなわち創作開始時には〈江戸期〉、それから〈江戸期以前〉、空間軸上では〈西洋〉、〈中国〉、〈関西〉に索めた。

時間軸から見ていくと、初期作品（『象』・『刺青』・『お艶殺し』・『お才と巳之介』^{みのすけ}等）に強く頭れている江戸情緒への没入は、草双紙^{くさごうし}や歌舞伎からの影響以外に、〈江

江戸期〉が当時の谷崎が在った日露戦争後の日本の時代状況から「遠く離れたもの」と想像されたことに由来する。千葉俊二氏が指摘しているように¹、作家の江戸趣味には、荷風と同じく、「『愚』と云う貴い徳」(『刺青』)を持っていた江戸の封建体制に對置された「賢」を称賛する近代という図式の文明批判も盛り込まれていた。しかし、上方移住後、潤一郎は自らの内部に居座った〈江戸期〉を憎むようになる。その感情には、「偉い」祖父によって樹ち立てられた家業をことごとく衰退させた「敗残の江戸っ児」(「私の見た大阪及び大阪人」, 20 卷, 374 頁)たる父親に対する近親憎悪が一方にある。事業が繁栄していた頃の母の倂をひたすら懐かしみ、一族を没落に追い込んだ父の「江戸氣質」を呪う心理は、独特の幼児退行性に彩られた作家のエディプス・コンプレックスであるという定義も可能だろう(中村光夫は、谷崎には「少なくとも智的な意味では青春がなかった」²と断言する)。そして、近代日本人の自我分裂を経験させる〈西洋〉来襲以前の遠い、〈江戸期〉よりももっと遠い〈江戸期以前〉(戦国, 室町, 平安)を恋い慕う気持ちが他方にある。〈西洋〉というものが前提とされていたからこそ、そのアンチテーゼとしての伝統とは何かが思考され、谷崎は〈西洋〉が無い日本の原型的風景である〈江戸期以前〉に想いを耽ったのである。

空間的なエキゾチシズムの対象として、〈西洋〉が選択されたことについては、明治生まれの谷崎としてはごく自然であろう。〈中国〉への郷愁(『西湖の月』『天鷲絨の夢』『鶴涙』等)には、白楽天や蘇東坡への愛着という漢学の素養、それに二度の中国旅行経験が働いていたと思われる。重要なのは、生粋の東京人である潤一郎が骨を埋める決心をした〈関西〉もまた、彼にとってエキゾチシズムを誘う地であったことだ。作家は「東京をおもふ」の中で、「自分は外人が広重の絵を珍重するような意味で、旧き日本をエキゾチシズムとして愛するのだ」(21 卷, 23 頁)と明言している。〈関西〉は時間的エキゾチシズムを掻き立てる〈江戸期以前〉と濃密に結びついた空間であったからこそ、谷崎はこれを愛したのである。

〈西洋〉へのエキゾチシズムの中の一つに〈ロシア〉が存在する。〈ロシア〉がエキゾチシズムの対象であり得たのは、谷崎がロシア文学を読み、日本に紹介されたロシア演劇を観たからだ。明治末から大正期にかけての教養主義の風潮のなかで、日本で受容されたロシア文化は黄金時代を迎え、〈ロシア〉は殊更エキゾチックな国であっ

¹ 千葉俊二「解説 痴愚の樂園」(平 10・8, 中公文庫潤一郎ラビリンス 4 卷, 中央公論社), 315-324 頁。

² 中村光夫, 前掲書, 15 頁。

た。『細雪』でキリレンコの兄が日本事情通を装って「トルストイ、ドストイェフスキー、日本の人は皆読みます」（15巻，80頁）と物語っているように、現代からは信じられないような〈ロシア〉ブームがこの時期には現前していた。『小僧の夢』の露国美人メリー嬢や『痴人の愛』のシュレムスカヤ夫人の描き方などから、〈ロシア〉を眺める当時の日本人の一般的雰囲気伝わってくる。〈ロシア〉はどこかしら魔術的な幻想をもたらす神秘的な存在だった。谷崎とロシア文学の関連について触れると、ロシア人作家のうちで彼がトルストイ、ツルゲーネフ、ドストエフスキイを愛読していたことは随筆や小説などから確認できるが、チーフについてあまり言及されていない¹のを筆者はやや怪訝に思っている。彼がチーフの作品を多数読んだならば、おそらくその熱烈な礼讃者の一人になっただろうと信じる。その他、ここで特に強調しておきたいのは、トルストイが谷崎の小説創造の方法にまで深く影響を及ぼしたという事実である（従来の谷崎批評では指摘されていない観点）。『細雪』の対位法に基づく形象造型や作品構成、ライトモチーフの原則に従う人物描写（「雪子の眼元に漂う翳」）という面で、潤一郎はトルストイの長編を模範にしたと推測する。

しかし、谷崎は〈西洋〉の一部としての〈ロシア〉を崇拜したばかりではない。前述したように、谷崎の〈ロシア〉に対する態度は、『独探』以来、これを仰視する視点と見下す視点の両方を兼ね備えたアンビバレントなものであった。双方の視点は modality（言説内部に投影された話者の価値評価）として谷崎のロシア人描写に厳然と現れている。作家が〈ロシア〉を野蛮な国と捉え、その住人を獣とする視点を形成する上で決定的な力をもったのは、やはり横浜や神戸で革命を逃れてきたロシア人の白人貧民を直接、眼にしたという体験であろう²。先にも述べたように、シベリア出兵後、多くの日本人が目撃することとなった亡命ロシア人の窮迫した境涯は、明治以

¹ 稲澤秀夫氏は谷崎が西洋作家に言及した回数を示す興味深い頻度順表（但し、一作品での言及を一回とみなす計算）を作成しておられる（稲澤秀夫『谷崎潤一郎の世界 西洋と日本のかかわり』，昭和56・10，思潮社，38-41頁）。この表に基づくと、ロシア人作家だけを取り上げるならば、1位トルストイ，2位ツルゲーネフ，3位ゴーリキイ，4位ドストエフスキイ，5位アンドレーエフとチーフの順番となる。

² この他に、ロシア＝野蛮な国という視点が生じてくる契機として、谷崎が中国旅行をした際、ロシア人によるトイレの使用状況が極度に不潔であるという感想をもったことが挙げられる——「私の知れる限りに於いて、白人のうちではロシア人が一番汚い。凡そロシア人の多く泊まっているホテルの便所は、大概支那の汽車のそれと同じような観を呈する」（『懶惰の説』，20巻，225頁）。現代に至るまで、ロシアのトイレの状況にさほど変化がない（特に田舎）ことは日本のロシア関係者が知るところである。

来の日本で培われてきた画一的な西洋観を破壊する機能をもった。時として彼らの変更された西洋観は、「西洋恃むに足らず」というような国粹主義的な西洋蔑視にまで転化した(シベリア出兵時や北満占領時に一部の日本軍人がとったロシア人への対応などには非道いものがある)。しかし、倣岸な西洋蔑視もまた、国家イデオロギーによって喧伝されてきた過剰な西洋崇拜やそれと同根の過剰な西洋コンプレックスに対する反動であることは明らかである。筆者は、『アエ・マリア』の「白のイデア論」から『蓼喰ふ虫』の「陰翳美学」に至る大正末-昭和初めの谷崎の過渡期に、黄禍論を背景とした対西欧的に国粹化の論調を濃くしていく国家イデオロギーの影響が認められるのではないかという仮説を立てたが、尊王攘夷が極度にまで達した太平洋戦争直前と戦中の時期には潤一郎はむしろ国家イデオロギーを乗り越えてしまった。その超克の原因は、あるがままの人間の生の観察に徹しようとするリアリズムの姿勢を作家が確立したからである。つまり、芸術が体制イデオロギーに勝利したのだ。『細雪』には、西洋コンプレックスを淵源とする西洋崇拜も西洋蔑視も共に存在しない。これらの代わりに、中立的な立場を墨守した作者が余すところなく人間を、時代を、風習を、文化を観察していこうとする^{どらん}貪婪なまでのリアリズムがある。それ故にこそ、この作品で谷崎は、日本文学史上初めて、ロシア人の真実な生態を描き出すことができたのである。

谷崎が亡命ロシア人にエキゾチシズムを覚えたのは、彼らと身近に接触できる機会をもったという理由からだけではない。エキゾチシズムの感情の裏には、自己の置かれた現状に対する不満がある訳だが、潤一郎が唯一「満足できる」場所は、東京下町の未だ旧幕時代の情緒が濃厚に残った幼少期の豊かな我が家であった。これが彼の幼児退行衝動の根源をなしている。同時に、彼は震災後の都市再建によってかつての郷土は滅びたという認識をもつ。「東京人に故郷なし」という言葉が繰り返し作家の口から洩らされる。「自分の熟知していた東京の下町は悉く灰燼に帰してしまい、町の条理さえも変ってしまった今日となつては、そこが自分の生れた土地であつたと云う以外に、何の因縁も感じられない。(…)もう東京の日本橋区と云う所は自分の故郷でなくなっている」(「東京をおもふ」, 21巻, 26頁)と、すでに戦前に谷崎はその胸中を吐露している。自分の故郷は喪われ、記憶の内部にしか保持されていないと感じる彼の意識が、祖国を逐われたロシア人亡命者の境涯に共鳴するのだ。潤一郎が亡命ロシア人に対して寄せるエキゾチシズムは、消失した自らの故郷への追憶を反映している。亡命ロシア人が革命前の旧き良き永遠の〈母なるロシア〉を無限の憧れ(「タスカー тоска」)を籠めて慕ったように、彼らの落魄した姿に触発された谷崎は滅び

去った己の故郷，そして，そこに生きる永遠の若き母の傍に想いを焦がしたのであろう。

筆者は本論稿において，ロシア人が登場する谷崎潤一郎の作品の分析を中心としながら，谷崎のロシア観，彼がロシアに興味を抱くようになった背景，革命後のロシア人の亡命経路，明治から昭和初期にかけての日露関係の有様，近代日本人の自我分裂や日露戦争後の欧米で顕著となった黄禍論の問題など，谷崎とロシアの関係を多角的な視野から把握しようと努めた。以上に展開された論旨が，読者に何らかの関心や感興を呼びさますことができたのなら，筆者の幸甚とするところである。この論文を閉じるにあたって，執筆の過程で数々の貴重な御助言を賜った現大妻女子大学比較文化学部教授中村健之介先生，日露交渉史に関する文献を快く貸与して下さり拙稿を徹底的に批正して頂いた東京大学スラヴ語・スラヴ文学研究科教授米重文樹先生，上海ロシア亡命文化が近隣諸国の文化に影響していると教示して筆者が谷崎とロシアの関連に眼を向ける契機を与えて下さったモスクワ世界文学研究所のキム・レホ氏，谷崎文学に関して啓発的な情報を寄せて下さった日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程の山中剛史氏（日本近代文学専攻），繁忙な中，筆者に代わって谷崎作品のロシア語訳文献目録をロシア国立図書館で調べて頂いた東京大学大学院スラヴ語・スラヴ文学研究科博士課程の伊藤友計氏に対して衷心より深甚なる感謝の念を捧げたい。

Дзюньитиро Танидзаки и Россия

Нобуаки КАКИНУМА

В настоящей статье рассматривается вопрос о связи японского писателя Дзюньитиро Танидзаки (1886–1965) и России. В его произведениях фигурирует довольно много русских. Можно насчитывать 7 произведений, где появляются персонажи российского происхождения: «Шпион» (Докутан в оригинальном японском заглавии, 1915), «Мечта мальчика» (Козо но юмэ, 1917), «Ночной рассказ о Хонмоку» (Хонмоку ява, 1922), «Аве Мария» (Аве мариа, 1923), «Любовь глупца» (Тидзин но ай, 1924–25), «Пучок волос» (Хитохуса но ками, 1926), «На вкус и цвет» (Тадэ куу муси, 1928–29), «Мелкий снег» (Сасамэюки, 1943–48). Главной задачей данной статьи являются 1) прослежива-

ние моментов мотивировки интересов Танидзаки к России, 2) рассмотрение его взглядов на Запад, отражающихся в изображении русского героя, и 3) объяснение внешне-политических русско-японских отношений того времени, составляющих фон происходящих внутри произведений действий.

Автор статьи останавливается на биографических фактах, стимулирующих формирование интереса писателя к России. Дедушка Танидзаки был верующим православной церкви, начало которой заложил архиепископ Николай (Иван Дмитриевич Касаткин) в Японии. Иконы Пресвятой Богородицы, оставленные дедушкой посмертно, произвели сильное впечатление на писателя в детстве. В молодости Танидзаки общался с японскими культурными деятелями, которые сильно увлекались русским искусством. Среди них можно назвать Сёсэн Оонуки (поэт, переводчик одного тургеневского рассказа), Каору Осанай (драматург, который ввел систему Станиславского в японский театр), Сэйдзи Танидзаки (родной брат Дзюньитиро, исследователь англо-американской литературы, переводчик произведений Мережковского и Гаршина). В 1921–23 годах Танидзаки прожил в Йокогаме и лично познакомился с русскими эмигрантами. В то время в Йокогаме сосредоточились русские политические беженцы, которые выбрали Японию как постоянное место жительства после октябрьской революции. В начале периода Сёва писатель встретился в Японии с выдающимся японоведом Николаем Конрадом и поговорил о плане будущего перевода его книг на русский язык.

Автор статьи полагает, что во всей писательской карьере Танидзаки наблюдаются две противоборствующие тенденции: устремление к Западу и искание своего национального корня. Подобную душевную расщепленность испытывали тогдашние все японские интеллигенты, которые были вынуждены пережить насильственную европеизацию общества под диктовку новорожденного правительства Мэйдзи. В период Тайсё Танидзаки выражает преклонение перед Западом. Однако переломной точкой стало написание «На вкус и цвет» — после этого он стремился изобразить чистую японскую красоту. Согласно мнению автора статьи, этому изменению содействовала общая культурная атмосфера в период конца Тайсё – начала Сёва, которая постепенно приобретала националистические окраски в противовес распространению на Западе общественных взглядов на желтую опасность. В указанном произведении писатель впервые нашел решение к сугубо личной проблеме, которая мучила его до тех

пор: одинакова ли белизна кожи женщин европейской расы и японских женщин. Он пришел к выводу, что белизна у европейских женщин имеет абсолютное качество, а у японских женщин — сравнительное: т.е. у последних красота белизны подчеркивается в силу контраста с тенью, чернотой. Это убеждение стало краеугольным эстетическим началом писателя, сублимировалось до оригинального понимания японской культуры, формирование которого можно увидеть в эссе «Похвала тени» (Иньэй райсан, 1933).

В описании русских в произведениях Танидзаки наличествует в качестве модальности две амбивалентных точки зрения: обожающая и снижающая. Первая объясняется тем, что в период Тайсё японская публика была ознакомлена со множеством русских романов и пьес, и Россия представляла собой особенно экзотическую страну. Образованию второй точки зрения способствовали те обстоятельства, что Танидзаки воочию увидел бедственное положение русских эмигрантов, проживающих в Йокогаме и Кобе. В «Мелком снеге» преодолены эти субъективные оценочные моменты, писатель придерживается нейтральной позиции по отношению к героям и успешно воспроизводит истинный облик россиян, что показывает рождение настоящего реалистического романа в японской литературе. Кроме этого, нужно отметить, что его интересы к русским эмигрантам неразрывно связаны с осознанием утраты своей родины (Ситамати в Токио). Основной мотив «вечно красивой матери» в литературе Танидзаки истекает из тоски по потерянному родному дому и культурой атмосфере, окутывающей Токио до землетрясения 1923 года. Думается, что, как эмигранты сохранили заветные воспоминания о дореволюционной «матушке-России», так и писатель под их влиянием вздыхал по молодой матери, вечно живущей в его памяти.